

324-113



天理教側面觀

「大阪朝日記者」 渡邊霞亭著

明治  
42 2 4  
丙午

大阪育文館發行

はしき

天理教の研究は中山美伎子が神であるか人であるかの問題にはあらずして「てんりわうみこと」が玉であるか炭團であるかの問題なり、芋であるか鶏卵であるかの問題なり、玉は貴けれご之を抱いて寒を凌ぐ料はならず、鶏卵は滋養に富めれご一般の飢を凌ぐには餘りに高價に過く、天理教は果して炭團なるべきか、果して芋なるべきか、乞ふこれを「天理教側面觀」に問へ

大阪朝日新聞編輯局に於て

明治四十二年一月

渡邊霞亭

# 天理教側面觀

渡邊霞亭

僕が始めて天理教の名を聞いたのは、殆んど二十年も前のことであらう、近所の或る爺さんが「近頃は不思議なことが流行する、それは悪さを拂ふて田ア賣りたまへ、てんりわうのみこと、と云ふて神壇の前に躍り廻るのである」と話して居たのを、側聞きした時であつた

この時僕は「てんりわう」といふ物は、罪惡を除き拂ふ爲めに、田や畑を賣る教へであるかと思つた、最も只爾う思つたばかりで、てんりわうのみことを相手取る者へなどは毫も無かつた

りれから五六年も経た後の事である、尾張國東春日井郡の下品野村といふから、美濃國惠那郡中津川村といふへ山越に旅行したことがある、さのみ險阻では無かつたが、俵などは原より通る、折柄夏の盛りで、いら／＼と煎り付くやうに熱い陽が照る、路傍の梢末には露しいほど蟬が鳴く、ろこを浴衣一枚の草鞋穿きで、てく／＼と歩行した、忘れもせぬ、肩にはろの頃流行た絨壇製の中皮囊を背負て居たのである

山路の上下に馴れぬ僕が、いかにこの一個の中皮囊を荷厄介にしたかは、想像するに難からぬことである、全身からはたら／＼と汗が流れる、石や木の根に躓いて、足の爪頭からは血汐さへ流れて出ると背後から『もし其荷物を持って上げませうか』と聲を掛けた

(2)

ものがある、振り返つて見ると、此邊の百姓と見えて、年の頃は四十八九か五十位と思はれるのが、平和の色の満ちた面にニコ／＼と笑を含んで『皮囊を此方へお貸しなされ、私が持て上げませう』と再び心切に云つてくれた

身には洗ひ晒らしの紺飛白を着て、紺木綿の兵古帯を締めて居るさうして手に小さい風呂敷包みを持たのは、近所の村へ使ひにでも行たのらしい

僕は皮囊を持って遣らうと云はれたのが、いかにも嬉しくて堪らんので『うれではどうか願ひます』と手渡した、ろの時の心では中津川の志す方まで持て貰つて、貳拾銀貨の一つも禮をすればうれで十分であらうと思つた

老人は自分の持つて居た風呂敷包みと、僕の皮囊を手拭で括り

(3)

合せて胸から脊中へだらりと掛けて、うのまゝさつさと歩いて行た  
皮囊に放れた時の嬉しさ、汗で絞るやうになつた浴衣の上を、  
青葉の間から吹いて来る南風に撫でられた時の快さは、今も記憶  
に残つて居る、僕が暫く其處に立つて、清しい風を納れる中に、爺  
さんはもう二三町も前を歩いて居る、僕はうの後姿を沈と見たが、  
この中に何とも云ひ知れぬ神々しい心を感じた、それは荷物を持って  
呉れた爺さんの身体から、御光がさす如く感じたからである、昔話  
に聞いたことのある山神の靈などが出て、僕の苦痛を助けて呉れた  
のではあるまいかと感じたからである  
こんな事を思つて居る中に、爺さんの姿が段々遠くなる、僕は後  
れじと追ひ掛ける、然し爺さんは歩が早い、僕の脚は疲れて居る、  
やつと追ひ付いたと思ふ頃には、爺さん峠の岩に腰を掛けて居た

(4)

僕の姿が近くなるのを、如何にも温い美しい小皺を眼尻に寄せて  
ニコ／＼しながら待て居てくれたが、僕がうの岩の前へ近づいた時  
爺さんはつと起て、又てく／＼と歩き出した、今度は中々追ひ付け  
ない  
この中に中津川村の入口へ付くと、爺さんは又僕の追ひ付くのを  
待つて居て  
「お前さん、何處へお越しぢやな、其處まで持て行きませうかな  
」といかにも心切に云つて呉れた  
然し僕は爺さんの足の早いのに驚きながら、年を老た人に重い荷  
物を持たせて、若い僕が徒手で歩くのは善いことぢやない、僕の重  
く感ずるものは爺さんも又重く感ずる、僕の苦しいことは爺さんに  
も苦しい理である、爺さんの荷物を僕が持てこり人の道であるのに

(5)

僕の物を爺さんに持たすのは宜しくない

「恰ど斯う考へ付いた時であつたから『どうも有難う、お陰で大きに助かりました、こゝまで御雑作を願へばもう理はありません、私の手へ頂戴します』と斯う云つて受け取つて、豫て考へて居た通り、貳拾銀貨を取つて『これは眞の少しですが』とさし出すと

「波相も無い、私はお前さんに禮を戴かうと思つて荷物を持って上げたのぢやない、これはお前さんの荷物で無く、神様のお荷物でござります、神様の物を持つのは、私共當然の勤めでござります」と云つて何うしても受けて呉れぬ

僕は更に色々詞を盡して『どうか受けて下さるやうに、これは私の眞の寸志であるから』と云つて勧めたが、それでもまだ受けてくれなかつた『私は今日神様に對して日の寄進をしたのでござります

(6)

一文でもお禮を受けては私の心が腐たります』と柔かに云ひ切つて其儘に去らうとした

そこで僕は後から追ひ纏るやうに『それでは止むを得んから、切てはお名前だけなりとも被仰つて下さい』といふと

「私は天理教の信者でござります」

と只一言を残したまゝで、さつくと返つて行つた、僕が天理教の名を聞いたは此時が二度目であつた

さては彼の爺さんが、悪きを拂ふて田を賣るのか、と不圖思つた悪きを拂ふといふのは、取りも直さず悪を去つて善に就くのであるから、此上の事は無い、但『田を賣りたまへ』といふのが何うしても解りかねる、殊に今『神様へ對して日の寄進をした』といふ『日の寄進』とは何の事であらうかと、一方ならず不審に感じた

(7)

けれど進んで、ろの不審を晴らさうとの心も無かつた、悪を去る爲めに田を賣る、神に對する日の寄進、この難解の理由を研究しやうとの心も無かつた

只一文の謝禮も受けず、この重い荷物を持つて、三里に餘る山道を此所まで来てくれた、さうして貳拾錢の謝禮をも受けず、さつさと元へ飯つて行た、爺さんの心切、爺さんの無欲、爺さんの正直な仕方「てんりわう」の教へはこんな結構なものかと感じて、其儘志す方へ行た

(三)

ろれから後五六年の間は、絶えて「てんりわうの命」の噂も聞かず、夏の炎天に山路でも旅行する時、彼の日の寄進の爺さんを思ひ出すばかりであつたが、大阪へ来た翌年、僕の下宿して居た宿屋の

(8)

妻さんが、ヒステリー性の疾患に罹つた、お醫者様も有馬の湯も一向に驗が無い

すると或る時、亭主の傳兵衛といふ男が、僕の居間へ遣て来て「どうもお躰しうございませう、御存じの家内の病氣で、醫者も樂も効驗がありませんから、二三日前から天理教の先生をお迎へ申して御祈禱を願つて居ります」と云ひ難さうに挨拶した

僕が天理教の名を聞いたのはこれが三度目であつた

傳兵衛の話で、不圖日の寄進の爺さんの事を思ひ出した、悪きを拂ふ天理教の先生は、どんな祈禱をするものか、直接にろの様子が見たいものだと思つた、僕が天理教に多少の趣味を感じたのは正しく此時からであつた

「天理教の先生、病人に對して何んなことをするのかね、僕も後

(9)

學の爲めに見て置きたいが、お妻さんの病室へ案内して呉れないかね」と頼むと傳兵衛は委細を承知して

「恰ど今先生がお入來になつて居ります、さうしてお諭しが始まつて居ります、あなたお心がお任りなさるなら御聴聞を爲さいまし」と斯う云つて呉れたのである

僕は白狀するが、此時まで實際天理教を馬鹿にして居た、天理教の先生といふものは、稻荷下や狐憑同様のものであらうと輕蔑して居た、日の寄進の爺さんは、いかにも正直で、いかにも潔白で、いかにも温和心切であつたが、それは彼の爺さんに見得ることで他の信者は何處の世界にもよくある例の迷信者流であらうと思つて居た

少くも天理教に對しては、爪の垢ほどの信仰もなかつた

傳兵衛に伴はれて、お妻さんの病室へ行くと、床の間には新藁が敷かれ、床の正面には神鏡の滑きが安置せられ、神檀には多くの供物、多くの神燈が点されて、見るから悲々しげであつた

妻さんは前の前に横臥して居る、折から冬の事で寒い風が障子の外を吹く、川縁の座敷は南受けになつて鈍い日が硝子越しに照らして居る、うの枕頭に坐つて居るのが、即ちうの先生といふのらしい白木綿の布子に、黒の眞岡木綿の三所紋の羽織、小倉の袴を穿いて鹿爪らしく膝の上に手を置いてござらせられる、色は淺黒く頬はこけて、八字髭がいかにも立派な

「ぢやに由て心の塵をお拂ひなさるぢや、心の塵が積つて來るとそれが種々の患をする、心の塵といふのは即ち欲心でござります、邪念でござります、惡望でござります、それゆへ教祖の説かれた九



下り目のお歌にも「四つ欲があるなら止めてくれ、神の受け取り出  
来んから」と示してござります、心の塵、即ち邪欲のあるものは、  
いかに神に祈つても、神のお受けを得ることができぬ、神のお受け  
を得ることができぬゆゑ、苦しい病氣災難にかよるのでござります  
お前さんはその心の塵が深山積つてある、それです様な御病氣に罹  
られたのでござります」

僕は天理教の先生が熱心に語る處を聞いて、そのお諭しに一面の  
真理の宿るのを感じた、欲心、邪念、悪望いかさま、是は心の塵に  
相違ない、金銀珠玉を鑲めた物体も、塵埃が掛れば不潔になる、不  
潔はやがて物休りれ自身の疾病である人間の身にも悪心邪念の塵が  
掛れば、遂に恐しい病氣となる、器物を清うするのは、上に積つた  
塵を清うするにある、人間の病氣を快うするには、心に積つた邪念

(12)

欲望を掃ふにある、天理教の先生、中々旨いことをいふ、ご感心し  
ながら聞いて居る、彼は更に百尺竿頭に一步を進めた

「心の塵を拂ひ得た上は、只神をお信じなさい、只天理大神のお  
手に頼つて、一向神をお信じなさい、神を信すると共に、お前さん  
を診て居られるお医者様をお信じなさい、神の道をお諭し申す私を  
お信じなさい、お前さんの病苦を一日も早く快くしやうとして、さ  
まゝに苦心苦勞なされる御家族御親戚のお方をお信じなさい、信は  
誠でござります、人間の誠は靈妙不思議の力を有する、凡そ世界の  
何物でも人間の誠に感せぬものはなく、又人間の誠に敵する者はご  
ざりませぬ、何故天理大神のお手に頼つて、一向に神のお助けをお  
頼みなさいといふかと申すと、神は誠の本体である、神は絶体無限  
の力をもつて、萬事萬物を意のままになされます、それで一たび神

(13)

意に適はせられさへすれば、必ずその人に無限の幸福をお授けになる、お前さんが心の塵を悉く拂つて、誠意誠心一念たご神をお信じなさる、一念たご医者様をお信じなさる、一念たご私をお信じ下さる、一念たご御家族御親戚をお信じなさる、すれば神はお前さんを救つて遣らうとの誠、醫者も又お前さんを快くしやうとの誠、私や御親戚御家族、皆悉く御病苦をお助け申さうとの誠、この双方の誠がひたりと一致する、神と人との感應がこゝに動く、すればお前さんの病氣は忽ちに快くなりませう」

先生は説き終つて、清しい眼に病人の顔を沈と視詰めた、その眼にはいかにも神の心が宿る如く輝き、その面には無限の真が溢れる如くに見えた、當の病人でない僕でさへ、先生の熱情に感せずには居られなかつた

其處で先生のお諭しを聞いて居る病人はと、見ると、深く兩眼を閉ぢては居るが、目皮に熱い涙の一滴が宿つて居た、口へ出しては云はぬが、今のお諭しが十分腹へ入たやうに見えた、病人ばかりでは無い、病人の周囲を圍繞する多くの親戚家族も亦爰然として悟る處あるが如く、深い皈依の色を見せた

これを見た僕は、今まで天理教を馬鹿にして居たのが、何となく澄まぬやうに感じた、今まで『てんりわうの命』を輕侮して居たのが、思ひ違ひであつた如く感じた、例へば瓦と思つて居たのが偶然にも玉であつた如く感じた、砂か礫と見て居たのが偶然にも金剛石ではなかつたか、と疑ひ思ふやうになつた

少くも天理教は馬鹿にすべきものでないと思つた『てんりわうの命』は決して輕侮すべきもので無いと思つた

僕は直に自分の部屋へ飯つたが、遺失物でもしたやうな心がして何んど無く面白くない、遺失物をしたやうに感じるのは、今まで天理教を捨てて置いたのが惜しい如く思はれるからである、天理教は世の所謂迷信家の集合團では無い、『てんりわうの命』は誠實を土臺にして、神の道、人の道を説いて居る、こいつ研究して見たら面白いかも知れないと思つた

悪きを拂ふのは、取りも直さず心の邪念欲望を去るのであらうが田を賣りたまへ、といふのが何の事か分らぬのである、天理教研究の第一着手としてはまづこの田賣問題から解決してかゝらねばならぬと思つた  
暫く考へて居ると、其處へ主の傳兵衛が遣つて来た

「どうです天理教も随分爲になることを云ひませう」と聊か得意の体が見ゆる

「僕はもう少し詰らんものかと思つたが、どうして中々立派なものだ、もう少し研究しないと解らんが、彼なら獨立の宗教として社會に立つて行かれるだらう」

「不思議なことには、彼のお諭を聞いてから、家内の病氣が大さう快くなつて来たのです、天理先生のお諭しの無い中は、醫者の云ふことなんぢちつとも用ひないで居ましたが、近頃は總て醫者の詞を信用するやうになりました、それだけでも非常な違ひです、世間では天理教に祈禱して貰ふと、醫者の藥を服ませないで、金米糖をかを呉れるつて云ひますが、全然悪口ですね、天理先生は全く誠を以て病氣を快くしやうとするやうです、ですから先生の熱心な様子

を御覽なさい、今日で三日になります、毎日三度つゝは必然来ます、さうして其度に神の道を説いて聞かせます、神の道が即ち誠の道ですから、病人でないものも皆な感じます」

傳兵衛大分天理教に身を入れて居るらしいから、僕は多年の疑問であつた「田を賣りたまへ」の一條を語つて「これは何ういふものかね」と聞くと、傳兵衛は腹を抱けて笑つて

「あなたまだ天理教にはツブ素人です、ね、田を賣り給へといふのは反對者の中傷で、それは御神樂歌の序歌第一にある「あしきを拂うて助けたまへてんりわうのみこと」といふのを振つたのです、誠の道を土臺にして教へを立てて居る天理教が悪きを拂ふために、田を賣りたまへ、ごらん馬鹿な事を云ふ筈はありません」と丁寧に説明して呉れたのであつた

これで田賣問題はさりと解決した、田を賣るのでは無く、助けを乞ふのである、助けを乞ふの大切なことは前にお諭しの先生も説いて居た、すると此の教へは「第一に邪念欲心を去つて、神の助けを乞ひ奉れ」といふ、これがその綱領であるに相違ない

田賣問題が解決すると共に、僕は「てんりわうの命」の本体が知りたくなつた、稻荷様でも無く、塩壇様でも無く、大和の山奥に鎮座しましたして、全國至る處に無数の信者を持たせられる「てんりわうの命」といふのは、全体どういふ神様である、それが知りたくなつたのであつた、由て早速傳兵衛に聞いて見た

「私もまだ眞の加入たばかりで、詳しいことは知りませんが、天理大神といふのは總稱で、全く十柱の神が合祀してあるんださうです、よ、天地萬有の物、一として神の御恵みに由らない物は無い、然

じろれく／＼にりの物、りの事を宰らせたまふ職分に相違がある、例へて云ふと姪子大黒は福を宰り、膳二尊は和合を主宰あらせたまふ、りの妙用に由つてお名が違ふから、一口に天神地祇八百萬神と斯う云ひます、最もりの本源に遡れば、一神一体になるんでせうけれど、各々其運用を分つた日には、どれくらゐあるか知れやしませんが、夫を悉く覽て居て、信心することは到底出来ないから、りの中で最も靈徳の顯著な神を十柱擧げて、これに天理大神と命けたのださうです、あなたが『てんりわうの命』と被仰るのは、要りりの天理大神の事なんで、十柱の神といふのは、國常立尊、國狹穗尊、豐料浮尊、大古邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊、大日靈尊、月夜見尊をさして云ふのです、だから天理大神を信心すればこの十柱の神を信心するに當ります』

僕はいよ／＼『てんりわうの命』を尊く思つた『てんりわう』は大和の山奥に鎮座します小さい神様では無くて、日本の國体に密接の關係ある十柱の神の總稱であつた、全体こんな便利なことを誰が考へ付いたのであらふ、靈徳の顯著であらせられる神様を十柱集めて、りれに『天理大神』の總稱を付し、更にりの神意神体を誠の一宇で包まうとする、天理教は誰が創めたのである、僕は又それが知りたくなつた

由て更に傳兵衛さんについて、其事を聞いて見たが、傳兵衛さんも天理教にはまだ新らしいので、満足な返答を與へては呉れなかつた、けれどもおぼろげに語る處に由ると、この教へは教祖中山美伎子の發揮唱導した處で、美伎子の身体にこの十柱の神々が神憑せられたのであることをだけを話して呉れた

僕は今の中山美伎子が知りたくなつた、中山美伎子とは遂に聞いた事のない婦人であるが、そんな學者で、そんな徳人で、又そんな智慧分別があつて、こんな教へを立てたのであるか、急にそれが調べて見たくなつた。

(四)

今だから白状するが、僕は實は中山美伎子刀自の生涯、經歷、天理教唱道の動機、及び布教、奇蹟、感化等の事蹟を考究する爲めに三度ほど大和の丹波市付近へ行つたのである、僕は下宿屋の主人傳兵衛の妻が、一布教者のお論しに由つて、大体の名醫が七を投げたヒステリー性の疾患が全快したのを見、傳兵衛や布教者の口から、天理教の組織を聞き、天理教の主義本体を聞き、更に天理教の書物を讀んで、大いに趣味を感じたからである、さうして丹波市へ行く

ごとに最初よりは二度、二度よりは三度と、行くたびにごとに土地の繁昌の増大するのに驚く、二十餘年前には二十五六戸の寒村であつた庄屋敷に、今は五六百戸の家屋が新築される、一條の大通りが貫通する、無数の信徒が遠くは清津地方からも群衆する、僕は今の開進歩の速かなのを見て、美伎子さんの教の高大なるに驚くと共に益す天理教を研究して見やうとの念が湧いたのである。

僕の調べた處に由ると、美伎子さんは大和國山邊郡三味田村の農で、藤堂大膳太夫（伊勢津の藩主）の無足人（庄屋たるべき家柄無論苗字帯刀を許されて居る）たる前川半七といふ人の長女である（母は絹子）寛政十年四月十八日の出生で、十三歳の時同郡庄屋敷村の富農中山善兵衛の家に嫁いで居る、この前川半七夫妻が大の佛教信者であつたことは、美伎子さんを研究する上に就いて、最も注

意すべき事件である

美伎子さんは根が農家の娘であるから、大した學問のある理ではないが、小さい時から他の兒童とは餘程行爲が異つて居たといふことである、うれに天性孝心に富んで居たので、六歳頃から父母の手助けをしたといふ、糸を紡ぐことも、針を持つことも、母や雇人のするのを見て、自然にその道を得たといふことで、八歳の時に大巾の木綿物を自ら裁て、兎も角も衣服を縫ひ上げたには、人々舌を巻いたさうである

斯く手藝に天稟の妙を得るほどであるから、両親の信仰する佛教には自然に興味を持って来た、一面に紡糸裁縫を手傳ふと共に、一面に經文和讃の教誦に勉めた、その結果十一二歳で出家遁世の望みを起して、幾度も尼にならうと思ひ立つたこともあるといふ、うれに

は單純な乙女の頭腦へ餘り多くの佛教趣味をつぎ込んだ所爲もあらうが、一つには性質虛弱であつた爲めに、到底一人前の婦人として社會に立つことは能きまいとの遠慮にも山たであらう

然し十一や十二で自ら出家遁世の志を起したのは、美伎子に先天的宗教心の横溢して居たのを証據立てることが能き、彼女は斯くして屢次の事を父母へ願ひ出たらしい形跡がある

が、慈愛厚き両親は蕾の花の美しきを、木の端と一般に見らるゝ出家の願ひを許す筈はない、娘がさほどに厭世觀を起すのも、必竟獨身で置くからである、十三にも爲れば其き婿を見立てよ、嫁入させやうとの相談もあつて、幾程もなく中山家への縁談が熟したのであつた

普通の婦人なら、姑舅の氣質、財産の有無、取分けて婿殿の性情

を取調べ、更に之れに由て色々の條件を提出する處を、美伎子はまづ中山家が果して熱心の佛教信者であるか否かを聞き定め、興入の第一要求としては「毎夜々業を終つてから、念佛を唱へてもよいのでござりますか」との提議をしたといふ事である、是にても彼女の信念の厚いことは知られる、彼女は普通の婦女が嫁入をする心ではなうて、尼寺へでも入るつもりで中山家へ嫁入したやうにも見える、中山家の妻としての美伎子は、實に近隣の褒物であつたといふ、性質多病の身を挺けて、野仕事にも従ふ、裁縫、機織總ての事を一身に引き受ける、農家の仕事として最も大切な綿木引は何人の手にも企て及ばぬほどに巧みで、二人以上の動作をした、ある人が「お美伎さんお弱いのにお休みなされませ」と注意したるに「私は弱い故人様の二三層倍も働きます」と答へたさうである、彼女の若

(26)

い胸には普通以上の優れた信念のあつた事がこれで知れるさうして暇のあることには佛に仕へる、夜は必ず心經と和讃とを讀誦する、それで無ければ睡眠につかぬ、十九の歳には早く已に淨土宗の奥に參じて、五重相傳を受けて居る、然も美伎子の信仰は他の佛教徒の如く、徒に後世の冥福を祈るをもて満足せぬ、彼女は佛敎の大主意に則つて、弘濟の實を擧げやうと決心した、彼女の向上せる心は

「人間の誠が何れほどまでに他を動かすものであるか、人間の誠が何れほどまでに社會萬物を靈化するものであるか」

それが試験したいと思つたらしい、彼女は二十數年の信仰に由つ

(27)



て、確に或る一物を感得して居た、それは他でもない

### 「人間の誠」

である

彼女は二十四歳で長男善右衛門（後に秀司）を産み、二十八歳で長女政子を産み、三十歳で二女安子を産んだ、恰どこの時のことである

美伎子の隣に足違何がしといふ富農が居た、これも藤堂家の無足人で苗字帯刀を允されて居る、處がうの子息の照之丞（後に源四郎）に乳が足りない、いかに金があつても、いかに権力があつても、出ぬ乳汁を出すことは能きぬ、うこで照之丞が日に瘦せる、父も母も我子の飢に泣く様を見て、生きながら肉を削られるやうに悲む、美伎子は隣づからこの悲惨事を見るに見かねた

### 人間の誠を試すのはこゝである

彼女は左右の手に三人の實子を抱きながら、二女安子の乳汁で、照之丞を養育しやうと云ひ込んだ、足違家の歎びは譬ふるに物もない、美伎子の厚意に絶つて、照之丞を伴れて来た

美伎子は最初虚弱の身であつたが、二人分三人分の勞働力行は、遂に彼女をして人並優れた強壯の身体にした、彼女は「人を愛するものはまづ自己を愛せよ、人を救はんとする者はまづ自己を救へ」この信念に由つて、自分の身体を立派にした  
けれど双の乳汁で二人の小供を十分に養育し得る事は不可能である、それを美伎子は自ら進んで、右の手に照之丞を抱き、左の手に安子を抱き、右の乳に他人の子を養ひ、左の乳に自分の子を育てんと決意した

乳汁の不足は人間の誠を以て補ふへく

決意したのである

然も天は美伎子にこの問題を解決すべき、好材料を與へられた、  
それは他でもない、照之丞が瘡癩に罹つたのである、瘡癩も瘡癩――  
黒瘡癩と稱する悪質の瘡癩に罹つたのである

もし是が普通の婦人であつたら、驚いて照之丞を實父母の手へ返すにちがひない家には三人の實子がある、万々一うれに感染してはならぬ恐懼から、必ず父母の許へ送り届けるに違ひない、けれど美伎子は悪瘡の患者を懐に抱いて、その實父母の手にも渡さうとはしなかつた

「健康で居た時さへ乳汁の不足する爲めに、病人の如く瘦せ衰へて居られたではござりませぬか、況して黒瘡癩の大病人、とてもあ

なたのお手で恢復の見込はござりませぬ、無病玉の如きお身体でお預り申したお子さんは、私の手で以前の健康なお身にして返すが、當然の勤めでござります」

これ彼女が足達何がしへ對する返答であつた、これ實に

彼女の誠の力を試すに絶好の機會ではあるまいか

いか

(五)

美伎子は黒瘡の患兒を抱いて、母家とは掛け放れた乾淨房に閉ぢ籠つた、第一の手段としてこのあたりに名の聞これた醫者を招いた針灸の名人を招いた、然し少しも験が無い

この上は神の力にお頼り申す外はない

人間の力に及ばぬことは、神のお力を借りるのが道である、彼は心に八百萬の神々の名を呼んで、照之丞病氣快癒の祈りを上げた、然し少しも験が無い

神の恵みの現はれぬのは、神に頼む心が足りぬからである、心の不浄が十分に除き去られぬからである、心の一念がまだ神の御許へ届かぬからである、心に汚穢ある者は、黒き雲に包まれる月の如く光りを現はすことが能きぬ、汚穢を拂つて然して後に、信心の誠を抽んずる、斯くせば神の御恵みの無い筈はない

彼女はつとめて心の邪欲を去つた、もろくの妄想悪心を去つたさうして念を清浄の空に置いて、夜家内の人の寐鎮まるのを待て、氏神へ洗足参りをした、けれど彼女はまた十分に満足することが能

次には二月堂觀世音、稗田武藏兩大師を心の中に勧請して、照之丞の病氣平癒を祈つた、この願望成就の曉は、三年三月洗足参りをする旨を誓つた、けれど彼女は尚十分に満足することが能きなかつた

遂に彼女は犠牲を捧げた

八百萬の神の御前に、骨肉の子の命を捧げた

「長男は家の相續人でござります、これだけは止むを得ませぬが残る二人の娘の中の一人の娘を捧げ奉ります、我が實子の命にかゝて、照之丞の一命をお助け下さりませ」

美伎子の祈願は高潮に達したのである、黒痘の病兒が熱に苦しむ枕邊に平伏して、心に神々の御名を唱へては「我子にかゝて照之丞の

命を助け給はるべき」旨を解つた

けれど彼女はまた十分に満足せぬ

### 次に第二の犠牲を捧げた

### それは自己の生命である

「子供の命のみで足りませねば、私の命をもさし上げます、私の命と娘の命とを立どころにお取り下されて厭ひませぬ、どうぞ照之亟の命をお助け下さりませ、お願ひでござります〜」  
夜深け人は鎮つて、初夏の風若葉を吹き、淡き星天に輝く時、美伎子のこの祈禱の聲が、澄み渡つて中山家の一室を漏れるのを聞いた時は、誰も身の毛の戦慄つ如く感じたさうである  
我子の命、自己の命、この二個以上に、何物も犠牲とするものは

ない、美伎子は唯一心に神を祈つた、この祈禱の間は彼女の心に欲もなく望みもなく、一点の他意もない、専念照之亟の全快を祈るのであつた

### 神の恵みは来た

### 心の誠の表現が見えて来た

照之亟の病氣は次第々々に快くなつた、さしもの熱氣が、祈禱の聲の一句づゝに消へ去つて、遂に全快したのである、美伎子の反対者でも、この一事のみは彼女が絶大の慈悲心として稱揚するに躊躇せぬのを見ても、美伎子のこの誠意がいかにか土地の人々を感じさせたかを知るに足るであらう

美伎子は到底助かるまじと思つた照之亟の病氣が、神の恵みに由

つて全快したのを見た時、夢でないかと驚いた、同時に

人の誠は人の命をも取り止めるものであることを知つたのである

美伎子の心は斯うして一歩づつ、神の心に近いて行くのであつた

(六)

照之亟の黒痘が全快して、ろのすがくしい顔に笑を含んだのを見た時、美伎子は生來未だ曾て覺れたことのない最大愉快を感じたに違ひない、此時彼女は

世の中に人を助け救ふほど、心持ちのよいも

のは無い

と感じたのが想像される、彼は

人間の誠は心の汚濁を洗ふて後始めて現はれる、誠の表現に由て神に祈れば神は必ず納受あらせられる

と斯う信じた、さうして更に

神は人をお救ひなさる、然し心に汚濁あるものは神のお側へ近くこそが能きぬ、神のお側へ近づくこそこの能きぬ人間が、何んとして神のお助けを受けることが能きやう、宇宙幾千

萬の人をして悉く神の恵みに頼らしむるには  
悉く心の塵埃を拂はせるにある。

然しそれを誰がする、誰がこの事を多くの人間に知らせて、多くの人間を救済する、これが最も必要な問題、又最も大きく廣い問題である、彼女は遂に考へた

人間の中に在つて、神に近い心を持つもの、  
始めて神と人との間に立つことが能きる、少  
しでも神の心に近い者、神の靈徳に攝するこ  
とが能きる

その神に近い人は誰である、神と人との間に立つ者が何處に居る

彼女はこゝに於て大覺悟をした

欲を離れる者神に近づく、人を救ふもの神に  
近づく、神の御意に則つて、神に近い行ひを  
するもの神に近づく、誠の表現の高いもの最  
もよく神に近づく

而しておのれまづ欲を離れやうとした、おのれまづ人を救はん  
とした、おのれまづ神の御意に則つて、神に近い行ひをしやうとした、  
満身の誠を披いて少しも多く神に近かうとした

こゝに於て彼女は近郷近在に類のない大慈善家と呼ばるるに至つ  
た

心を助けんとするには、まづその体を助くるにある、彼女は村中

の貧しい者に、米を與へることを勉めた、衣服を與へることを喜んだ、もし病人でもある時には、自ら薬を持って行つて與へた、さうしてその家に對つて、神の恵みのあるやうに祈つて遣つた  
彼女がいかに慈善につとめたかを知るには、こゝに一つの適例がある

ある年の秋の末であつた、朝から時雨が淋しく降つて、木枯の音が瀬戸の森に鳴り響いて、不覺寒さの身に感む時、年の頃三十二三と見ゆる女乞丐が、海藻のやうな縋縋の單衣一枚を身に纏つて、うの懐に裸牀の乳呑兒を抱きながら、頬の肉も落ち、顔の色も蒼ざめて、美伎子の家の門口に立つた、恰ど米穀の收穫時で、美伎子は多忙を極めて居たが、この女乞丐が憫れに食物の殘餘物を乞ふを見てつか／＼と立ち出でたが

(40)

「おゝ不憫さうに、お前よりは乳呑兒が寒からう、幸ひに喫餘りの粥はあるが、氷のやうに冷切つて居る、暫時待たつしやれ、喫べ好いやうに温めて進せうぞ」

と云ひ聞かせて、手づから粥を温めて恵んだ、

然しこゝまでは誰もする、同じ遣る物でも氷の如に冷めたのよりは、温くして與へた方がよいと云ふまでは、誰の胸にも感付くことであるが、美伎子の慈善心——欲望から離れやうとする心——は中々それだけで満足せぬ、瘦せ衰れて骨と皮になつた乳兒を見て「親御には心ばかりの事もしたが、お前には何もせぬ、待たつしやれ／＼」

と云ひながら垢だらけの乞丐の兒を取り上げて自分の懐へ抱き入れ、他くまでも乳汁を嘔まして、母へは綿入の布子、兒には新らし

(41)

い巻蒲團を與へ、さうしてその後姿の見わすなるまで見送つたといふ事である

(42)

穢しい乞食の兒を抱き上げて、うれに自分の乳汁を與へるのは、容易のやうで容易でない、それを美伎子は平氣で遣て居る、彼女は總の動作に於て、心の塵埃を脱り去らうと心掛ける、後年彼女が咽喉の哽れるまでも大聲叱呼して、千万人を長夜の睡眠から覺まさうとした「日の寄進」は此時から無意味に實行されて居たのである、彼女は欲望の解脱から得た大慈悲心に續いで、一方に婦人の一大失たる嫉妬の念を絶對に芟除して居る、彼女の理想から云へば、嫉妬も亦穢しい心の埃に違ひない、少しにても神の御心に近かうとする彼女の向上心は、貴賤を通じて苟くも人間と名の付いた者の胸から雲の如くに湧き起る嫉妬の情を、物の美事に根絶して居る、然るも

の恨怨あるべき婦人に向つて、慈悲の花を與へて居る

彼女の心の或點は、當時から早や神に近づい

て居るのであつた

彼女の良人善兵衛は悪魔の誘ふ處となつて、下女のかのといふに私通した

此事は秘すより現はれて、直ちに美伎子の目に止つた、彼女は此間に何ういふ處置を取たであらう

(七)

下女のおかのは美伎子が向上の路に横はる一大障礙であると共に又美伎子大慈悲心の發動を試むるべきメイトルであつた、彼女は夫とおかのとの間に、怒し難き秘事の行はれ居るを知つて

(43)



後も、その事の無かつた前も、夫とおのれとの情愛關係、及びおかのとおのれとの主従關係に、寸分變る處なく遇して居た、のみならずおかのに對つては

### 眞實の妹の如き愛を注いだ

もし善兵衛がおかのを伴ひて、隣村の祭禮に行くことありとせよりの時おかの爲めに化粧の水を解いて遣るのは美伎子であつた、おかの爲めに美しい衣裳を取り出し着せて遣るのは美伎子であつた、更におかの爲めに美しく髪を結んで遣るのは美伎子であつた、然しおかの美伎子の誠を歎ぶ様が無かつた、美伎子が心切に遇して呉れるのを、深き意味のある如くに感じた、善兵衛の愛情も美伎子を離れておかの上にのみ注いだ

おかの美伎子を殺して、おのれ善兵衛の妻たらんことを願ふに

### 至つた

美伎子はおかのにこれほど恐ろしい心があらうとは知らぬ、最愛の真人を奪つて、尙飽き足らざるの身の命を奪ふべき悪謀があるとは知らぬ

ある日恐ろしい味噌汁は、おかの手に由て美伎子に薦められた美伎子は味の味噌汁を食すると共に、激烈なる腹痛を感じた、次に強き痙攣を感じた、次に數回の大下痢をした、さうして次に人事不省に陥つた

けれど神に近い行爲のある人は、従つて神の助けを得る事が早い心に微の塵埃もない物は、従つて神の御影を宿すことも早い、濁つた水よりも清しい水に、星の數の多く映るのは此理である

普通の人間ならば、中毒の結果、冥途黄泉の客となるべきであつ

(46) たが、美伎子は暫時にして蘇生した、枯木にも春の風が渡る、一時冷たくなつた彼女の身体に少しづつ温氣が加はり來るのであつた。彼女は漸くにして息を吹き返して、その身の枕頭を見た時、三人の小供が熱い涙に呉れて居るのを認めた、良人善兵衛が手を又いてそこに黙然と坐つて居るのを認めた、殊におかのが眼を圓くして美伎子の顔の上を見詰め居れるのを認めた。

「おやお母様御回復なされた、醫者を呼んで來い、お薬をさし上げよ」

三人の子の飛び立つやうに騒ぎ立つのを制して美伎子は徐に斯う云つた

「騒いではならぬ、私は心に病氣があるのでは無い、或る恐しい毒に中つて、今の様に苦しんだが、その毒は悉く下痢して終うた、

私の腹は水で洗ふた如に清くなつて居る、私は神様のお手に由つて助けられた、醫者にも及ばぬ、薬には仍さらに及ばぬ」

毒に中つたと聞いて、人々は皆な驚いた、然し美伎子はるれに就いて何事も語らなんだ、只最後に

「毒も用ひやうに山つては薬になる、私は今喫べた毒の爲めに、却つて腹中の穢れを悉く下した、一時は殊の外に苦んだが、そのお陰で胸の底が爽快となつた、これも皆神のお恵みぢや、皆が神様に

お禮を云ふて呉れねばならぬ」

これ最も神に近いものゝ詞ではあるまいか、其後も又美伎子はおかのを妹の如くに寵愛して遣つた

ことに白刃を提げて、頭を切るべく背後に立つものありとせよ、其者は正しく我身の敵である、その下手人の口の側に、恐しき毒蟲

の匂ふを認めたまへば、及の下に坐つた人は何とするであらう、毒蟲一たび唇の中に入らば、敵は立どころに命を失ふ、敵の仆れるのは身の復活である、敵の死はりの身の生である

美伎子は徐に起つて、敵の命を奪ふべき毒蟲を取り除くのである自分の生を願はずして、敵の死を救ふのである、さうして再び白刃の下に坐るとも、敵はりの頭に刃を當てる筈が無い

美伎子は斯くして悪魔の心を感化したのである

おかのは遂に堪へ切れずして實家に歸つた「中山のお家様に澄まぬく」と云ひつゝけて、三年後に病死した、真心からの懺悔にはいかな大悪罪も消ゆるといふが、それでも尙神符は巡り行くのである

(八)

次には神憑のことを記さう

神憑といふと、人は直に狐憑か何ぞのやうに云ふが、決してうんな理はない、僕の考へるのには

神に近い行爲ある者が、次第に神に近づいて神の囁きを聞くまでに向上するのである、語を換へて云へば、人間がその極致に進むのである、人と神との境界に置かれた隔が次第に薄くなり行くのである

ではあるまいか、凡人の目に奇異の如く感せられるのも其爲めである、凡人の目に麻痺不思議の如く感せられるのも其爲めである

電信電話の理の知られて居ない未開の人に向つて、東京の人と大阪のひとが坐ながらにして談話を交へ、英國と日本とが僅かの時間で文字を交通すると語つたら必ず奇異に思ふであらう、人間社會にうんな不思議の有る筈は無いと云ふであらう、けれど電信電話の道理を知つたものは日常茶飯事として誰も異むものが無い如く、神に近い者が神の囁きを聴き得ることも、世の人がまだ其處まで向上進歩して居ないから、有るまじき事の如に思ひ異しむのかも知れない。

理屈は兎も角、美伎子は天保九年十月二十六日、神憑を得たのである、これは天理教の信者ばかりでは無い、彼の地方の人は皆な一様にこの事を信じて居る。

恰ど其頃美伎子の長男秀司が足痛にかゝつたから、隣村長瀬村の市兵衛といふ大修験者を招いて病氣平癒の加持を頼んだ、其處で市

兵衛先生は中山家の廣間に神座を設け、曲田村のろよといふ老婆を加持代にして、有らん限りの丹精を凝らし、有らん限りの信心をもて、加持を勧めた、其効験空しからず秀司の足痛が立どころに平癒したけれど、夫は僅の間で、一月ばかり経つと再發する、再發すると加持を頼む、加持をすると又快くなる、さうして一二年を経る中に、美伎子の身体が風の如く軽くなる、ふはくと天にでも昇るやうな感じがして、物を見るのが極めて重々しい、浮世に交るのが何んもなく厭はしくなる、と思ふと、十月二十三日の夜から秀司の足が激烈に痛んで来る、今度は秀司ばかりでなく、善兵衛は眼が悪くなる、美伎子自身は腰の骨に痛みを覺ゆる、これではならぬといふので、直ちに市兵衛先生を迎ひに遣る、先生はろの日村内の何がし方へ来て居たのであつた

「それで早速駆け付けねが、おろよ婆さんを迎いに遣る暇がない。肝腎の加持代が無くては、加持をすることができぬ、一同どうしやうかと考へた末、

### 美伎子を假の加持代に推す事とした

これが神憑の發端である。美伎子は身に淨衣を纏ひ、手に幣を持つて神の座の正面に坐る、秀司と善兵衛とは左右に引き添つて、一心不乱に神の御名を唱へる。市兵衛先生は美伎子と對ひ合せて丹精を抽でる、爾う斯うする中、不思議や美伎子は顔の色が變つて來る、手に持つ幣が風も無いに左へ揺ぐ、冬の月は寒く東の山にかゝる、万籟寂として夜氣冷かに肌に通る、物凄さは臂ふるに物も無い。此時美伎子は兩眼を赫と開いた。

「うの光りが電光の如く人を射る、相好が何處となく常と變る、きつと良夫善兵衛に向つて

### 我は天の將軍である

と斯う呼んだ、うの聲が常の調子でない、宛ら大將軍が三軍を叱咤する如くに聞こゆる、善兵衛は驚いて頭を下げる。「此屋敷は神の預め定め置かれた因縁の土地である、今約束の時節が到來したゆゑ、有らゆる世界の人類を助くる爲め天降つた、此屋敷は云ふまでもない、母子とも併せて申し受けねばならぬ」市兵衛先生は新加持代の口から、こんな託宣を聴かうとは思はぬ例の丹精を中止して、じつと顔を見詰めて居る、善兵衛秀司居合せた親類の甲乙も、暫くは惘れ果て、物を云ふものも無かつた、がやがて善兵衛が恐るゝ頭を上げて

「お詫言ではござるが、此屋敷と所持の田地とは何れも祖先傳來の物で、我等一人の物ではござりませぬ、小供は天の授かり物、妻には今年二つになる乳呑兒もござります、家事一切この者の手で整理せねばならぬ事情もござります、此ばかりは何卒お赦免を願ひます」

と云つたが、已に神憑を得て居る美伎子は、今までの人間ではない

「うれば爲らぬ、神の預め定め置かれた約束に由つて申し受くる速に渡さつしやい」

それから後三日三晩の間は、たゞの事ばかりを云ひ續ける、手に持つ御幣は間断なく戰慄する、その間一刻の睡眠もなく、又一碗の食事も無かつた

善兵衛も列座の親戚も、今は辭するに詞が無い、もじ強てゝの意に従はぬと云はゞ、美伎子は幾日幾夜の間、同じ態度を續けるかも知れぬ、由て二十六日の朝五時、善兵衛は遂に意を決した、心を決して神意に従ふ旨を答へた

「さらば止むを得ぬ、仰せに従つて總ての物を掲げるでござりませう」

「きつと爾うか、間違ひはあるまいな」  
幾度か念を推して、善兵衛の確實な返答を得ると共に、美伎子は常の如くに鎮つた、美伎子は常の穏かな顔に爲つた

それで常の如く食事をして、常の如く寢に就いたが、夜は更けて風の音靜に窓に當る時、天井の上に高く凄じき音がして、急に身体を壓へ付けられるやうに感じた、すると耳の根に明かな聲がして

「われは國常立尊である、我に代りて神この世に出づるぞ」

(50)

と宣はせたといふ、美伎子は「はッ」と惶みて伏床の上に起き直らうとする、忽ちに身が軽くなる、天井に又前のやうな凄じき響きがする、さうして更に朗な聲を聞いた

「我は面足尊である、われに代つて神この世に出でますぞ」

この叫びを聞く前には、必ず身体が重くなつたさうである、斯うして交るゝに十柱の神の詔宣を聞いた

「我に代つて神この世に出づる」とは夫等の神々が美伎子の身体に憑つて、神の意志を行はせやうと爲さるのである、最後に美伎子

は十柱の神の宣として

「自ら貧究の底に陥らねば、眞個の艱難の味を知ることが能さぬ、眞個の艱難の味を知ることが能さねば、さうして他の艱難を救ふことが能きやうぞ」と告げしめられた

美伎子はこれに倚つて更に深く覺悟する處があつた、今までは身に温い物を着、口に温い物を食つて、心の誠を實行しやうとした、左に暖爐を抱いて、右の手に氷の底を探らうとしたが、それは人間としての慈悲善根で、決して神の心に由る慈悲善根でないのを覺つた

神の心による慈悲善根は、身を貧究の底に投げて、眞の艱難を味ふにある

(57)

彼女はこの託宣を得てから、殆んど正氣の沙汰とは思はれぬほどの施興をした、まづ第一には嫁入當時に持つて来た五荷の荷物を空にした、次には中山家の田地に手を付けた、良人や我子の衣服調度にも手を付けた

彼は人に物を施與することに

「凡そ社會に散在せる森羅萬象は、皆な神様の御物で人間の物ではない、人は分限に應じて神様から色々の物をお預り申して居るので五荷の荷物は私の物でなく神様の物、中山家の田野山林は中山家の物でなく神様の物である、これを今お前方に進ぜるのは、神様からお預り申したのをお返し申すのであるから、少しも遠慮辭退するに及ばませぬ」

と云つて渡した、拾錢の物を恵んで、壹圓の名聞を得やうと心掛ける者の多い世に、女の命と頼む衣服調度を賣り拂ひ、更に良人の家の財産をも賣り盡して、慈悲の費に充てやうとする、然もそれが名聞の爲めでは無く、神様からの預り物をお返しするのであるから遠慮辭退するに及ばぬと云て施行するのを見て、村の者は寧ろ奇異の感に打たれた、村の者が奇異に感ずるばかりで無く、現在の良人、現在の小供までが、殆んど狂人を以て遇するに至つた

美伎子は一面に貧者病者孤獨餓寒を救ふと共に、一面に他の精神



界をも救はうと發願した、彼女の佛教皈依の心は、何日の間にか轉じて、絶對の神道家となり終つた

(九)

彼女の事業には種々の迫害が襲來した  
第一は家族親類の迫害である

美伎子は神の意に頼て、神の命する處を行ふのであるが、善兵衛は原より親戚縁者の人々皆な美伎子の深い心を知らぬのである、美伎子は自ら

十柱の神に代つて神の意を實行するのである  
こいふ

が人々は少しも信せぬ、中には發狂したのぢやないかといふもあ

(60)

り、又狐が憑たのではないか、と疑ふものもある  
けれど美伎子は意に介する様が無い  
美伎子は無頓着で居るが、限りのある財産を以て、限りのない鰥寡孤獨貧者病者を救済する事は能きぬ、美伎子が神の託宣を奉じて自ら貧究の底に陥らうとする結果は、善兵衛も秀司も、他の小供も勢ひ飢寒が日に迫る、これに驚いて理を盡し詞を盡して無益の慈悲を思ひ止まるやうにと云つたが、美伎子は聴き入れる様が無い、善兵衛は遂に意を決して

此上は是非が無い、最愛の妻ではあるが、家の名、家の譽れには換はられぬ、傳來の一刀を揮つて、彼女の身に憑き居れる狐狸妖怪を

(61)

### 退治しくれう

と覺悟するに至つた、當時の善兵衛の心、當時の善兵衛の煩悶、思ひ遣るだに憐れである

ある夜、妻の枕頭に立て、氷の刃をすらりと脱いた

「お前は何故ろの様な心になつてくれた、お前が狂人同様の行爲をするので、世間からは笑はれ親族からは交際を絶たれ、家は次第に貧しく、俄は魔の如くに迫る、我を助くる心があらば一日も早く悔ひ改めよ、もし狐狸妖怪の所爲ならば速かに去てくれよ私はこゝに傳來の一刀を所持する、この功力は忽ち妖魔の魂を照らすであらうに」

と、涙ながら説き諭した、美伎子の或る心は正しく神に同化して居るが、身は依然として人間である、良人が涙ながらに説き諭す詞を

聞き、又翻つてろの身が慈善を初めてからの家の状態を考へると、ろごろに涙の下るを覺ゆる、この身さへ無くば良人に此惱みもあるまじ、家も小供も安全に成育するであらう、良人の手に掛るのは易けれど、斯くては良人に殺人の罪科がかかる、生きて良人に苦勞を掛くるよりは、死してこの苦患を免かれた方がよからう、さあはれ心に覺悟した

「私は私の身体で私の自由になりませぬ、私の自体には神様が憑らせて在らせられます、私の生きてある間は、とても此苦患を免かるゝこと能ふまじく、さればとて良人のお手にかゝることあつては、後に残る小供の行末が惨めでござります、私を私の思ふやうに處決させて下さりませ」

と云ひながら幾度か溜池の淵へ駆け行つたが、心の一方には十柱

の神が憐れらせてある、

世を救ひ人を助くる爲めには、家も良人も最愛の我子も捨てる覺悟がなくてはならぬ。

と耳の側に叩く聲がする、それを振り放つて身を沈めやうとする、兩足が痙攣けられる、ふらくと眼がくらむ、そこで彼女は  
我は神に代つて世に出たものである、すれば  
我は血や肉で生きる者ではなく、靈で活くる  
者である、人では無く神である

迷ふべき所ではない、と卒然として覺つたから、更に勇猛心を振り起して、良人、我子、親戚縁者の人々が聲を限りに忠告して呉れる、心切な詞に耳を閉いで終つたのであつた

彼等は斯くして第一の迫害に打勝つた

### 第二の迫害は貧苦である

善兵衛は美伎子が五十六の時に死んだ、我妻の神に近い事業に悩まされながら、あはれ貧苦の中に長逝した

善兵衛を失ふと間も無く、先祖傳來の田地に離れた、先祖傳來の家屋敷に離れた、今は旦夕の蓄もない憐れの境に陥つた、甚しい時には三度の食事にも事を缺いた、燈を点す油も盡きては、凍るが如き月の前に立つて、貸仕事をした事もある、

けれど彼女は安如として神の意を行ふことに勤めた、偶々我子の愚痴を溢すことでもあると

「いかに究らぬとも、究らぬこと云ふことはな

らぬぞ」

と言ひ諭し、更に詞を續けて

「いかほど宛らぬやうになつても、お前達に  
乞丐はさくぬ、難義と不自由と困苦とは、人  
間の世に處する物種であるぞ」

と訓へた

彼女は斯くして第二の迫害に打勝つた

### 第三の迫害は山伏修験者の暴行である

美伎子が彼の神樂歌の序歌十一章を作つて、頻りに「助の教」を  
説いた時である

初めは狐憑よ、狂人よと罵つて居た人までが、桃李言はず下自ら

蹊を作して、美伎子の膝下に集つた、美伎子の慈悲善根から起る、  
救済天啓の教へは、遠く河内攝津伊賀伊勢紀伊の國々までも擴まつ  
て、信仰の輩は櫛の齒を挽くが如く遣つて来る、昔の家の面影もな  
く、今は軒も傾きさうになつた茅屋に兀坐して、夫婦和合、一致協  
同、日の寄進の三大主義を講ずる、信徒等はるの態度を見るに忍び  
ぬと云つて、賣り残された二戸前の土蔵を毀つて、其處に形ばかり  
の勸業所を築く、その中には加持もある、祈禱もある、例の誠の表  
現に由つて病人を癒くすることもある

斯く美伎子の教へが弘通すると共に、反對批難の聲も一方に高く  
聞こえる、美伎子の教へが識者學者有限者から冷罵せられたのも此  
時からである、天理教が「てんりわうの命」と輕侮せられて、迷信  
の問屋の如く云はれたのも此時からである

それはこの地方を中心にして近郷近在に散在する多くの山伏修験者が、美伎子の教に由つてその職業を奪はれる恐れがあるから、口を極めて美伎子を悪口したに始まる、現在の良人、現在の我子、現在の近親縁者すら、狂人狐憑と疑つたほどであるから、反対者の眼からは悪魔外道の如く見わたに違ひない

美伎子は狐を遣ふのである、美伎子は悪毒を混和した菓子と與へる、美伎子は名を神の供物に托して、もろくの財を集める、美伎子はつまらぬ喋語の餘りを述べて愚婦愚夫を迷はせる、彼の布教は皆な虚偽である、彼の手足は悉く迷信者である、と此種の悪言が雲の如くに集まる

けれど美伎子は平氣で居た  
のみならず専念に「助け一條」をくり返した

(68)

あらゆる悪言あらゆる誹謗、それが美伎子の上に何んの影響も無い處から、今度は一舉して暴力を加うるに至つた、その發頭人は小泉の不動院である

小泉の不動院は多数の徒弟を有する、修験者にしては彼が第一の地位に居る、凡そ彼の地方の加持祈禱で、不動院の差配を受けぬものは一人もない、加持祈禱の收入は不動院をして庄屋以上の生活を得せしむる、それが美伎子の教への弘通するに從つて、根本を覆へされさうになつた、不動院の多年占めて居た地盤が、忽ち動きさうになつた、不動院の爲めには生活上の大問題である  
彼が暴力を以て美伎子を退治しやうと覺悟したのも無理の無い處である

慶應二年の春、彼は多くの徒弟山伏修験者をかり催して、美伎子

(69)

の勸業所へ襲來した、さうして美伎子に向つて

「説法と祈禱とを中止せよ」

と申し込んだ

美伎子はさほどの迫害に恐れるほどの薄志では無かつた、彼女は泰然として

「自分は人間でない神である、身体は中山美伎子であるが、心には十柱の神が宿らせてある、私の説法は神のお聲である、私の祈禱は神の所業である、この教法を妨げんとならば、まづ十柱の神を退治し來れ」と答へた

然し彼等は理屈を聞くのが望みでは無い、彼等は只美伎子の口を閉塞すれば足る、美伎子の勸業所を破壊すれば足る、神が何であらうとも、教がどうあらうとも、説法祈禱の兩道を断絶すれば足る、

由てまづ祈禱用の太鼓二個を打ち破つた、入口に建てあつた大提燈二張を引き破つた

それでも美伎子は泰然として居る

彼女の説法は太鼓以上に響き、彼女の精神は

大提燈以上に輝く

さばかりの妨行は彼の布教に何んの影響する所も無い

不動院及びるれに付随する修験者山伏は、遂に最後の手段を取るに至つた、最後の手段とは一面に暴力を以て威赫し置き、他の一面に神佛二教の眞議を論ずるにある

不動院及びるれに付随する修験者山伏は、一齊に佩んで居た大刀を引き抜く、明暗々たる刃を美伎子の面前に突き出して、多人數が

ろの周囲を取り圍む、さうして不動院は有らゆる難問を試みた  
(72)  
ろの問答が何んな事項であつたか、少しも傳つて居ないさうであ  
るが、幾十口の大刀も美伎子の心を威赫するには足りなかつた、自  
ら神の御心に由て進退し居れりと確信する美伎子は、白刃をも恐れ  
ぬ、暴言をも恐れぬ、況して不動院の難問、ろの以下の修験者山伏  
の論議、彼女は馬の耳を東風が吹くほごにも感せぬ、随つて問へば  
随つて答へる、

美伎子は彼等が豫期して居たほごに文盲では  
なかつた

或は書物を讀んだことは無いかも知れぬ、或は天理天啓の文字が  
如何なる意味に當て候まるかをさへ知らなかつたかも知らぬ、けれ

ど彼女は實際の學者であつた、書物を讀まぬ學者であつた、文字を  
知らぬ學者であつた、詞は拙くとも其云ふ所は悉く理に當つて居た  
不動院は遂に美伎子の爲に説き伏せられて飯つた  
彼女は斯くして第三の迫害にも打勝つたのであつた

(十)

ろの頃この邊りに守屋筑前といふ神官があつた、自ら守屋大連の  
末業と稱し、大和一國に我等ほごの學者は二人とあるまいやうな顔  
をして居た、これが美伎子の噂を聞いた

「何んぢや、無學文盲の老婆、神の使など稱して、道を説き人  
を救ふとは片腹痛い、必定世を欺き、民を惑はす似而非女に相違な  
い、よしく乃公が眞誠の神の道に依て、ろの化の皮を引き剥いて  
呉れやう、乃公の光りの照る處に左様な狐憑が横行することは其意を

得ぬ」

筑前は斯う考へた、鳥無き里の蝙蝠は徐々とも巢を出た装束も立派に、供人五六人を伴れて、美伎子の勤業所へ乗り込んだ。だは、不動院が来て太鼓を破つた五六日後の事であつた

「當家の主人は近頃盛んに神の道を説くさうぢや、この界隈の神事は慮外ながら我等が預かる、今日はその主意を聞きに参つた、お身は全体誰の許可を受け、誰の式によつて神の道を説かつしやるのぢや」

筑前は真向から論難する

けれど美伎子は泰然として居た

美伎子が筑前に向つて、さういふ返答をしたか、それは傳らぬ、兎も角長時間に亘つて論議を試みた末、筑前は美伎子の前に平伏し

た

「いかさま此方は神の御使ひである、今までは祿でもない妖婆、荒唐無稽の詞をもて、愚婦愚夫を惑はすのみ思ふて居たが、これならば立派なものぢや、これならば神の教へとして弘通するに差し支ない、及ばすながら私も力を盡して進せる」

當時筑前一人の同情を得るのは、幾十人の土地の信徒を得るにも優た悦びであるから、長男の秀司、及び美伎子を圍繞せる信者世話方は殊の外に歡んで、何分お願ひ申し上げる旨を答へる、筑前は又云ふ

「これほど立派な教議を持たれながら、不動院如き者の暴行を受けられるも、全く傳道布教の公許を得られぬからである、宜しく速にこの手續きをお履みなさるがよろしからう、萬事は拙者が手續き



を履んで進める」

筑前は神祇官領吉田貞熙の配下で、大和一國の取締を勤めて居たから、領主藤堂大膳太夫の添書を得て、吉田家へ出願の周旋する、りの結果、慶應三年七月二十三日京都神祇官から秀司を召喚する、さうして神道布教の許可を與へた

これが天理教の公邊に知られた始りである

然しこの許可は明治維新の改革と共に無効となつた、神祇官の許可證は無効となつたが、美伎子の口は幸に無事である、彼の教は一片の許可證に由て輕重せられるものではない

明治五六年から七八年頃には、美伎子の評判がいよゝ高くなる「助けたアまへ、てんりわうのみこと」の神樂歌が全國に布及する各國に信者が生きる、りの信者は千里を遠しとせずして、庄屋敷の

本部に集まる

此時第四の迫害が来た

### 第四の迫害は奈良縣廳の干渉である

奈良縣廳では「てんりわうのみこと」の繁昌を以て風教を紊るものと認め、明治八年八月二十六日、美伎子及び秀司の代人辻忠作を奈良縣監獄署へ召喚して、美伎子を三日間の拘留、忠作を五日間の拘留處分に處した、美伎子が「てんり」さんの爲めに法律の制裁を受けたはこれが始めである

りの後も同じ理由に依つて、美伎子は屢次拘留に處分せられた、身体は鉄窓に繋がれても、精神は庄屋敷の本部に残る、美伎子は監獄に投せられても、神の主意は信者門人の胸に宿るので、幾度拘留しても「てんりわうのみこと」の傳道にさしつかへは無い、美伎子

が奇禍に遭ふごとに、信者はいよ／＼信仰の念を固める「てんりわうのみこと」の名はいよ／＼都鄙に喧傳する

美伎子は堅く神の使者と信じて居る、牢へ入れられやうが、警察へ引張られやうが、神の使者たるに於て、何の干係する處も無いと信じて居る、それで巡査が拘引に来ることに

「私は何んぞ悪いことをしたのでござりまするか」と問ふが例であつた

うの様宛ら五六歳の小兒の如くで、いかにも無邪氣に見ゆるから巡査は心に氣の毒を感じつゝ

「お前は何も知るまいが、お前の側には悪い者が付いて居るから、それでお前を伴れて行くのぢや」と答へる、するど

「それなら何處へでも参ります、然し御飯を食へ、着物を着る間

お待ち下さりませ」

と徐に唇に向ひ、徐に衣服を着かぬ

「このお方も腹が空くであらう、早く温い御飯をお上げ申せ」

うれで巡査にも食事を與へて、悠然と伴はるゝのが例であつたさうな

然し十八年頃までは、只「てんりわうのみこと」の名のみあつて、確然とした名は無かつたが、十八年神道本局の許可を得、始めて

### 神道天理教を標榜した

けれど警察の干渉は依然として更なる事もなかつた、八年始めて法律の制裁を受けてから、十九年までに、二十餘度も拘留處分を受けて居る、然も驚くべきはこの拘留の間、美伎子が

絶えず断食をするのである

短い時は三五日、放免せらるゝ事もあるが、長い時は二十日以上に及ぶこともある、美伎子は其の間、必ず断食を實行する、これさへも已に異状であるのに、更に驚かれるのは、其の断食の結果が

少しも身体に現はれぬことである

二十日以上も断食して身体に影響せぬ筈は恐らくあるまい、それに美伎子は、入監する時と、放免される時と、其の皮膚の色に變りがない、其の眼の色に變りがない、其の体力に異りがない、更に其の元氣に異りがない

一宗の開山とも呼ばれる異常の人には、例として必ず奇蹟の伴ふものであるが、美伎子のこの断食は到底人間の方で解する事の能き

ぬ奇蹟、更に其の断食が些も肉体に影響せぬのは、其れにも優つた奇蹟である、彼女は監獄を出ると共に

直ちに布教に従事した

彼女は斯くして第四の迫害にも打勝つたのであつた

(十一)

僕が前後三回丹波市附近に遊んで、美伎子の経歴を取り調べた所は前に記した通りである、美伎子は熱心な佛教信者であつたのが、慈悲善根に由つて世を救ひ人を助けうと發願したことだから、次第に向上推移して、遂に神の使命を受ける身となつたのである、僕は彼女に逢つたことは無いが、彼女の経歴に由つて想像すると、彼女はふつくりと肥れて圓滿な相を持って居た人らしい、一たん思ひ立ちことは死を以ても貫かうとする、女に似げない大勇猛心を持って居たら

しい、自信を貫く爲めには命も財産も、夫も小供も、悉くを犠牲にすべき大覺悟があつたらしい、爾して學問をした人ではないが、天と神とに攝觸せんとなつてゐる中に、自然と誠の道を得た人らしい、その性質はいかにも無欲で、いかにも淡泊で、いかにも克己心が強く、又いかにも無邪氣であつたらしい、言葉数は少いが、その重々しい説教は直に人の弱點を衝いて、その心を收攬めるに妙を得て居たらしい、温和の中に冴すべからざる威嚴があつたらしい、比喩を卑近のことに取て、比較的尙遠の理を説いたものらしい、嚴格な中に人の懐く特性があつたらしい

兎も角多くの迫害に打勝つて、一宗の祖と呼ばれるに至つただけ何處かに樂い處があつたらしい、彼女の説いた

(82)

### 天理教の極意は何んであるか

### 僕は亦それが知りたくなつた

然し僕は天理教の信者で無い、傳兵衛を除く外天理教の信者に一人の知人も持つて居ない、それで十分に研究する便利を得なかつたが、それでも天理教に關する二三の著書を讀んで、おぼろげにその教意のある處を知つた

天理教の主神は天理大神である、天理大神は十柱の神の總稱である、さうしてこの教は大神の盛徳に由つて

### 人間の罪惡と禍害を除くのである、人心を

### 誠の道へ導くのである

十柱の神の合祀といふと、名は多神教であるが、實は一神教に近い所もある、美伎子はその神樂歌に於て、縷々數百言「てんりわう

の命」の教義を説いて居るが、これを總括すること

### 夫婦の和合

#### 一致協同

#### 日の寄進

の三ヶ條になる、美伎子はこの三個の問題を捉げて、大和の山奥に立つたのである

僕は最初尾張の山中で、天理教信者に夏の皮囊を持つて貰った時始めて「日の寄進」の語を聞いて、長の間何のことも分らずに居たが、段々研究の歩を進めるに就いて、その意義がやつと分つた

#### 日の寄進は努力の寄進である

これをハイカラに儼正しく云ふと、犠牲の精神とも解せられる、

私利私欲の念を離れて、努力を神に捧ぐる、神に捧ぐるのは即ち社會に捧ぐるのである、尾張の山中で見ず知らずの爺さんが、僕の爲めに靴を持つて呉れたのは、取りも直さず爺さんの私心の無い神への捧げである、貳拾銀の禮で終む努力の寄進は、極めて些々たるものであるが、これを大きくすると、國家社會に對する莫大の寄進となる

今の管長中山新治郎さんが日露戦役の勲功に山つて、勲六等に叙せられ、瑞寶章を賜はつたのも、四百萬の信徒が心を一にして、この犠牲的精神を捧げた結果である、實に彼の國家多難の時に當つて天理教徒が恤兵、傷病兵慰問、軍人遺家族の救護、軍人遺族子弟の教育等に盡した功績は決して少くない、宗教團としての成績は、東西本願寺の次位に居る、遺族子弟の教育費だけでも、壹萬參千餘圓

を落捨て居るといふに至つては「てんりわうのみこと」全く聚い  
日の寄進が清く面白く、簡易に精神的に行はれる實例は戦役當時  
のみに限らぬ、天理教の存在する土地の道路橋梁の修繕普請には、  
必ず多くの「日の寄進」がある、天理教付屬の建物を築造する場合  
にも、又この美しき勞働の寄進を見る

日の寄進は實に天理教徒の生命で、又天理教  
徒の花である

(十二)

美伎子の教意と、その經歷の大体を知つた僕は、進んで教典の  
如何なるものであるか知りたくなつた

天理教には教典がある、これを緋けば天理教

の主義綱領が知れます

と彼の下宿屋の傳兵衛が知らせてくれた、元來天理教は

文字の教へでない

天理教は美伎子が一代の至誠を以て、十柱の神に攝觸し、神の意  
と信する處に由つて、人間の道を説いたものであるから、彼の神樂  
歌十二下りの他には、少しも筆墨の窺ふべきものがない、美伎子が  
生きて居た中は、一の至誠を以て道を弘めた、此外に何んの求むる  
處も無いのであつたが、美伎子は永眠する、信者の數は年々増ゆる  
街めにも

四百万人の多数信者を網羅する一大宗教に、  
一冊の教典もなくては、羅針盤の備へなくし

て大海を航行するも同じであるこの主意(88)  
から美伎子の教嗣である中山新治郎氏が、美伎子の徒弟数人と共に

美伎子平生の教旨に由つて、その義理教旨を  
文字上に現はしたものである。

故に天理教を研究するには、勢ひまづこの教  
典を研究せねばならぬ

天理教典は第十章から成る、これを讀むと、明かに天理教の全約  
が窺はれる

### 第一章は敬神章である

これには天神造化成育の靈徳妙用が説かれる、更に進んで萬物攝  
理の天理が説かれる、苟くも人間たる者は必ず神祇を崇敬せざるべ  
からざる所以が説かれる

### 第二章は尊皇章である

僕はこの章を讀んで、天理説に勅王尊皇の意義が單つて居るのを  
知つた『てんりわうのみこと』は實に『悪きを拂ふて助けたまはる  
』だけではない、その教義の大本には

### 敬神尊皇の一大主義が組み成されて居やう

とはお釋迦様でも御存じの無い事であらう  
これで見ると、美伎子は

### 我皇上を天定の君主なり

と確信し、且つこの事を信徒全体に説いて居る、故に生を我國土に得た者は

神恩を神に報ずると同一の至情を以て、誠忠を皇室に盡さねばなりません

と教へて居る、敬神尊皇はもと一致である、之を幽明にしては神これを顯明にしては、皇土、の間に二つはないと教へて居る、天理教徒が或る問題に逢着することに、こゝを前途と

「日の寄進」に憂身をやつして、奉効の誠を盡さうと心懸けるは、

全く美伎子の教養が徹底したのである、この意味から云ふと美伎子は女装した平田篤胤である「てんりわ

うのみこと」は極めて立派なものである

(十三)

### 第三章は愛國章である

第一第二の二章に於て敬神愛國の教へを説いたから、第三章には天神國土を生成し、之を人間に與へたまふのは、この進歩發達を期し給ふ所以を説き、皇室と國土との關係に及んで

### 愛國の義を明かにしたのである

美伎子は誠意を以て人を愛する、誠意を以て神を敬する、誠意を以て皇室を尊崇する、更に誠意を以て國土を愛する、眞に國土を愛する者は、清浄な勞役に服する、一致協同の實を擧げる、夫婦和樂の境にある神聖な勞役は彼女の一大主義である、或



は殖産に、或は工業に、各々の業を勵んで、勦勉力行國家の爲めに盡すのは、人たる者の本分である、もしりれ戦時に至つては、上下一致協力して、或は智略を講じ、或は武勇を奮ひ、防禦に、攻戦に各任務を盡して死を辭せず、皇室の稜威を發揮し奉り、國家の進運を扶くるは又人たる者の本分である

夫の愛國婦人會の主唱者として名高い奥村五百子女史は、この義勇奉公に就いて天下の婦女子に愛國の存念を發輝させた、五百子女史の功績は上下萬民が悉くこれを認める、然し五十年前に大和の山奥の一老婆が

盛んに義勇奉公の道を説いて居たのを知つた人は多くあるまい

僕は天理教を研究するについて、つくづくと考へた、最近歴史的な女子として、最も多くの精神界を支配した傑物は

### 美伎子と五百子の二人である

と、五百子は陽に立つて奮闘したが、美伎子は陰に坐つて説教した、五百子は八方に遊説して、舌の爛れるまでも義勇報公の道を説いたが、美伎子には只庄屋敷の一隅に潜んで、撒神愛國の理を説いた、五百子は男性であるが、美伎子は女性的である、五百子は極めて露骨であるが、美伎子は多少の濫蓄がある、五百子は相當の學問を持つて居るが、美伎子は殆んど無學の一老嫗に過ぎぬ、然し

多くの信者を持つて居るのは同一である、多くの精神界を支配して居るのは同一である、義

勇奉公君忠愛國の意義を説いて居るのは同一である

故に僕はこの二人を以て

近世女流の二傑とする

第四は明倫章である

食す嫌ひの人は大半の滋味を嘗めることさへせぬかも知れぬ「てんりわうのみこと」といふと一概に迷信家の問屋の如く思ふものがある「うむ、天理王か」と鼻頭で冷笑するは、天理教の名を聞いて天理教の何物かを知らぬ人である、甚しいのは

天理教を敗倫の邪教と信じて居る人もある

實は僕もりの食す嫌ひの一人であつたが、この明倫章を讀んで見

て驚いた、

美伎子は神明葬倫の大道を明かにして居る

「暑往き寒來り、四時行はれ日月其位を改めず、善榮は惡滅び、正は贏ち、邪は輸く、天に在りては之を天道といひ、人にありては之を人道といふ」

これこの章の冒頭である、美伎子は誠に此の如き見易き詞に由つて、天理大神の意を説くのである

夫婦和樂は美伎子が三大主義の一つである

夫婦の道は人倫の大本、父子の道も之より起り、兄弟朋友の道も又これより起る、美伎子がいかに夫婦の道に重きを置いたかは、神樂歌序歌第二章の始めに

「このよのちいとてんをかたごりて、ふうふをこしらへきたる  
でな、これは此世のはじめだし」  
と説いて居るのでも知れる、故に最も天理教に精通した人の語る  
處に由るこ

### 天理教徒には絶えて夫婦喧嘩がないさうであ る

夫婦喧嘩は取りも直さず一家の秩序を亂すものである、家の平和  
は國の平和である、平和の家には富が宿る、平和の國には黄金が満  
ちる、もし美伎子の教へが廣く世界に行はれるに至つたら、勢ひ犬  
も食はぬ夫婦喧嘩が後を絶つに至るであらう、夫婦喧嘩は一面に滑  
稽を意味し、一面に悲酸を意味し、又一面に敗倫敗徳を意味する、  
美伎子が第一に目をこの閨門の上につけたは、美伎子の最も楽い處

彼女が

神の意を得た者の如く吹聴するも全く根據の  
無い事ではない

(十四)

### 第五は脩徳章である

人は神から清淨無垢の靈光を感受する、これを徳といふのである  
徳は真心の本元で、又意識の根底である、由て人の始めてこの心を  
神から受けた時は、白玉の如く清く、又明鏡の如く清らかであらね  
ばならぬ

けれど中には事と物との蒸染に由つて、清いのと濁つたのが生  
きる、善人と悪人とが生きる、同じ鏡にも曇りのあるのがある如く

人にも又塵埃のかゝるものがある、然し鏡は極めて清浄であるのが  
本体である如く、人は又極めて至善至良なのが本体でなくてはなら  
ぬ

(98)

曇りの掛つた鏡は眞の鏡で無く、塵埃のかゝ  
つた人間は眞の良民で無い

故に常に神明の照鑑を畏れ、幽冥の洞觀を耻ぢて、欲を制し、ろ  
の意を誠にして、神から與へられた靈光を全うせよ、と説いたので  
ある、靈光は即ち魂である

美伎子が「悪きを拂ふて助けたまへ」と絶叫したのはこゝである  
悪きを拂ふのは即ち心の塵埃を拂ふのである、心の塵埃はやかて鏡  
の曇りである

心の塵埃を清く拂ひ得たもの、やがて徳を脩  
め得るのである

第六は祓除章である

祓除章は天理教の肝腎要である、心の塵を拂ふて天理を其心に求  
め、神魂始めて善に皈するの道を明かにしたのである

どうしたられば善人になるか、どうしたられば神  
に近い行爲をすることが能きるか

これ美伎子が最も苦心し煩悶して、氷解しやうと力めた疑問であ  
る

いかにせば絶対に人を救ひ得るか、いかにせ

(99)

ば精神に慰安を求め得べきか

これ美伎子が最も心を盡して研究した問題である

心に塵埃の無いもの始めて神に近づき、心の塵埃を少しにても多く除き得る者、最も大なる慰安を得る

これ彼のこの問題に対する解釋の第一義である、彼女は心の埃を八擧げて居る

- 第一は貪婪（ほしい） 第二は慳吝（をしい）  
第三は邪愛（かあゆい） 第四は憎悪（にくい）  
第五は怨恨（うらみ） 第六は忿怒（はらだち）

第七は高慢（たかぶり） 第八は慾

これを入埃といふのである

もし人に貪婪の心が無かつたら、いかに楽しく安穩であらう、もし人に物を慳む心が無かつたら、いかに清く真直であらう、もし人に穢れた愛情が無かつたら、いかに正しく平和であらう、もし人を憎むことも無く、人を怨むこともなく、高慢する心もなく、更に總ての欲心を離るゝことを得ば、いかに静かに、いかに穩かに、いかに世の中が無事であらう、人間の心に塵埃を除くは、鏡の曇りを拭ふも同じである、教典の筆者はこの八埃に就いて、精細の解釋を施して居る、左に摘要する

貪婪は欲望である、欲望には善惡の二面がある、善は希望、惡は貪婪、希望は一身の上から云つて無病健全、身を立て家を興し父母

の名を顯はすを希ふが如きもの、大きく一家一國の上から云へば、善く富み、善く榮へ、日に進み、月に發達して、遂に世界を凌駕せんとする如きもの、一身一家一國民の上には必ず無かるべからざる感念を云ふのであるが、貪婪となると趣意が相違する、即ち自己の本分を忘れて、妄りに他を貪り取らんとするのである、假へばこゝに一斗の袋ありと假定する、こゝに一羽の鶴ありと假定する、一斗の袋には一斗の米を容るべき天理あり、鶴は陸の上に生活する天理がある、もし一斗の袋に一斗五升の米を容れんとし、陸上に生活すべき鶴が水の中に入りて餌を撈獲らんとする如く、天理に違背する時は、忽ち其物の破滅失敗を招くに見て、人生の希望に限りあるを知らねばならぬ

をのれ金持に爲らんと思すれば、身を粉にして

労働し勉強し、さうして金持となるべき基礎を作れ、もし然らずして徒らに金持とならんとし、世の富者を羨む心を起さば、遂に法律の罪人となる時があらう  
天理に反する物は總て塵埃である、天理に反する欲望は悉く塵埃である  
慳吝にも又二面ある

一面は儉惜、一面は慳吝、儉惜といふのは、信用を惜み、名譽を惜み、時間を惜み、正當に金錢を惜むので、人生の幸福は多くこれから生ずるが慳吝は全く反する、出すべきを出さず、散すべきを散

せず、務むべきを務めずして、一圖に財を吝むのをいふのである、自分さへよければ他人は何うなつてもよいといひ、國家多難の時に臨みながらも、自分の財を割くことを吝んで、世の爲めにも人の爲めにも盡さず、只私利私欲のみを付る、これ等は慳吝の最も甚しいものである

人と生れて富貴を願はぬものはない、富貴を願ふのは、一身一家の平和幸福を祈るにあると共に、國の富強發達を期して、臣民たる身の本分を盡すにある、一家貧しければ父母へ十分の孝養を盡すことも能きぬ、子弟に十分の教育をすることも能きぬ、一國貧しければ、いざ列強に當らうとする時、無念の涙を呑むことが屢次ある、國家公共の事に關して、應分の資を捐つるは原より人生の美德であるけれど、財産のないものはりの勤めを十分に盡すことすら憚はぬ

故に人は勤儉力行して正當の財を蓄へよ、蓄へた財産は國家有益の事、子弟教育の事、公共慈善の事に、能ふだけの支出をせよ、それを吝むものは正しい人間ぢや無い、それを吝む心はやがて心の塵埃である

もし一縣は一國の爲に吝み、一郡は一村の爲に吝み、一村は一家の爲に吝み、親は子の爲めに吝み、子はおのれの爲に吝まば、藏に金銀米穀の多くを積みつゝ、遂に餓死の止むを得ざるに至るであらう、これも皆な

天理に反するいふ、最も甚しいもの、一つである

邪愛は正愛の反對である  
 愛情は生物の總てを貫く温い風である、草木  
 禽獸魚蟲介藻の末に至るまで、およそ生とし  
 生けるもの、一として愛情のないものは無い  
 けれど邪愛は眞の愛でない、邪愛は美しい花  
 を食ふ恐しい蟲である

父母の子を愛するは最も清い正しい神聖の愛である、師の子弟を  
 愛するも及最も清い正しい神聖の愛である、一夫一婦の愛、朋友信  
 義の愛、兄弟和合の愛、皆これ清き花の如き愛である

けれど吝嗇家の錢を愛する、好色漢の婦女を愛する、愛すべから  
 ざる物を愛する、みなこれ魔の如き邪愛である、邪愛の極は

正路を外る、

姦通の罪人、高利貸の不信、繼父母の長幼を誤りたる世嗣問題、  
 一として源を邪愛に發さぬものはない

邪愛は人類和樂の天理に反する、邪愛は最も  
 穢い心の塵埃である

憎悪にも二面がある

善面は正憎で、悪面は邪憎である、正憎は國家に害ある者を憎む  
 信義に反する者を憎む、公益を犠牲にして私利を營む者を憎む、忠  
 貞を害ねて上に阿る佞物を憎む、不孝の子を憎む、不悌の弟を憎む



節操なき妻を憎む、金の爲めに義を賣る者を憎む、悪むべきを悪むは人間自然の特性にして、又人間處世の要訣である。けれども邪憎に至つては爾うでない、姦臣が忠臣を憎み、繼母が繼子を憎み、姑が善良の嫁を憎み、嫉妬のあまりに他を憎み、私欲を圖るために公益を憎み、私道を行く爲めに公道の直なるを憎む、皆なこれ

天理に反するものである、みな是れ心の誠を

穢す塵埃である

怨恨にも二面ある

他人の爲めに陥られたるものは、その陥れた人を仇敵として怨む、他人の爲め君や父を害せられたものは、その人を不俱戴天の仇

敵として怨む、怨むべきを怨むは、人情自然の發動として思むべきことでは決して無いが、中には無理なことを怨む輩がある、假へば力士が勝つた相手を怨み、悪人が刑を課した裁判官を怨み、借金しながら債主の催促を怨み、不義をしながら制裁を加へた主人を怨み、運命に泣かすして天を怨み、己を責めずして他を尤め、その極は遂に法律の罪人となるに至る、これ皆な

天理に反する事にして、心の鏡にかゝる塵埃

である

次は忿怒である

忿怒にも又善惡の二面が無くてはならぬ、國家外患のある時に際して、敵愾の心を起すのは所謂忠憤、不義

不信の人の社會に跋扈するを見て、心に鐵拳を堅むるは所謂義怒、これ等は皆な臣民の情として然らざるを得ぬ所である。けれどもその反對の惡面に至つては、所謂私憤で心の塵埃たるを免れない。私憤の裏には短慮が潜む、短慮の底には過失が宿る、一時の怒りを忍ぶ能はずして、百年の身を過るものがいくらもある、これ等は皆な

天理に反する事で、心の塵埃の甚しいもので

ある

次は高慢である

高慢は一面に於て自信を意味する、一面に於て自重を意味する、自信自重は人間に缺くことの能きぬ美性で、苟くも自信のない者は

遂に何事をも爲すこと能はず、苟くも自重のない者は、成功を守る  
ことが能きぬのである、けれど亦一面には輕侮を意味する、驕慢を  
意味する、人を輕侮するは天理でなく、没りに驕るのも天理でない  
富んだ者は貧しいものを輕侮し、學んだものは學ばぬものを蔑如  
する、けれど富貴貧賤はもと天理の命に出たもので、人間の價に於  
て何んの淪る處もない、富貴であるからとて驕り慢ぶるにも當らね  
ば、貧究であるからとて自ら卑むには當らぬのである

假し貧究であるとしても天理に従つて勤勉勞働  
すれば、自ら富貴顯榮に至る時がある如く、  
今日いかに富貴であつても、その行爲が天理  
に缺ける時は、忽ち貧困の地に落ちる、

(112) 故に人は徳を高く誠を第一に爲なければならぬ、其徳を誠にすれば、身は勝を容るゝに足らぬほどの茅屋にあつても、心に無上の安樂がある、けれどもその徳に誠が無く、不義に富み、不道に榮えて、身を大厦高樓の中に置いた處が、それは何んの譽れでもなく、又何んの樂みでもない、心に自信自重さへあれば、

繾綣を纏つても金殿玉樓に出入される、富貴顯榮の人と伍される、

もし此理を知らずして徒に貧賤を賤むものがあれば、それは

天理に背くのである心の塵埃に穢れるのである  
次を欲とする

### 欲は塵埃の根本である

欲心から出た動作は悉く罪惡汚濁である、欲は心の田から生れた大きな幹で、それに貪婪、慳吝、邪愛、憎惡、怨恨、忿怒、高慢の枝を生じ、それから又それに色々の枝條が出てゝ、悪い塵埃が繁り合ふから、遂に良い心を陰蔽して了ふやうになる

天理を害すること、實にこれより甚しいことは無い

然し人と生れて欲の無いものはない、同じ木の幹から出ても、徳の花の開くことがある、塵埃の添はぬ欲は神魂本性の徳である、徳の明かなるは鏡の明かなるに比ぶる、鏡に曇りがあつてその明を蔽ふ如く、人に塵埃があつてその徳を傷ける、故に美伎子は

八の塵埃は心の玉を玷うする暈翳、心の鏡を蔽ふの穢れである (114)

と云つて、欲を塵埃の最後に加へた、八の塵埃を拂ふて、八の善を留むるは、鏡を拂ふて皓々の光りを見るが如く、心を拭ふて神魂天賦の靈光を認むる

物は動いて塵を生じ、神魂は動いて虚を生ずる、虚を生ずる處欲心ろれに乘じ、七埃ついで湧き、罪惡汚穢又従つてろこに起る、魂の動かぬ小供の間は、宛ら水の如く静かだ、又清水の如く淨しい然し小供には分別がない、分別は人間性情の發動である  
神は長へに靈徳の圓滿を保たせたまふが故に、人間の上に超脱して赫々たる光明を我等人類の上に投げたまふ、けれど人間の悲しさ

は爾ういふ理に行かぬ、目に見ぬ多くの微菌が、絶えず空間に瀰蔓する如く、一欲七埃は常に人間神魂の上に往來する、衛生に際がある時は、各種の微菌が人体の中に食ひ入ると同じく、少しでも邪望を起す時は、八の埃が遠慮なく心の中に泌み込むのである  
故に人は寢るにも起きるにも、行くにも坐るにも、勤めて埃を蔽ふことに注意せねばならぬ、常に神様から授けられた天性の中正を保つことを心掛けねばならぬ、もし果して

心の塵埃を悉く蔽ひ去らば、その人は神に同じき身となるのである、禍害の根を悉く脱して、圓滿幸福の世界に詣るのである

### 第七を立教章といふ

ことには神人合一の理が説かれてある、人は靈魂を神から享ける靈魂は不盡不滅で、その妙用に究りが無い、然も靈魂は時々刻々に活動する、由て人は前の章に説いてある如く、一には徳を修め、二には塵埃を拂つて、胸には常に光明が輝き渡り、心の海には微塵の渣滓も無いやうになると、始めて豁然として神明に感接する、これがやがて

### 神人合一である

けれど悲しいことには、人の心に塵埃が絶わぬ、偶には善智善能の活用を見ることもあるが、忽ち又塵埃の爲めに蔽はれる、塵埃は即ち煩惱で、拂へどもく又來る、その煩惱から解脱したもの、始

めて神の心を享けることが能きる、神の心を享くるもの、神に近い行爲をする、世に神に近い人はあつても

### 神の心と合一になるものは少い、實に億萬人の中の只一人である

もし神の心と合一になるものがあれば、神の人の人に由て教を垂れさせられる、それで其思ふ所は即ち神意で、其言ふ處は即ち神命である、

美伎子は女ながら夙くから神明を崇め敬ひ、  
人の力では及びもない幽幻の境に分け入つて  
神の心と合一になることを得たから、遂に天

理を明かにするに至り、その心を以て天理教を立てた、美伎子の説く處は即ち天理の神教であるから、教徒は須く之を確信して安心立命の地を得よといふにある

### 第八は神恩章である

盛に神の恩徳が説いてある、神は則ち天理大神の事である人もし心の埃を去つて、神明賦與の本性に皈り、神に事へ、誠を持し、さうして其道を愆らさば、神は必ず恵愛を垂れたまふ、

恵愛といふのは一切の災難を脱れさせたまふことである、靈魂長く無限の慶福を享くるこ

### ことである

これを古くは「神の恩頼」と云ひ、俗に御利益といふは是である元來神様は我等人間を小供の様にお愛しなされる、尙へば立たんことを念ひ、立てば歩まんことをお思ひなされる、一つ吉いことをすれば又吉いことをするやうにと恵みを垂れ、少しでも悪い事をすれば、再びうんなことをしては爲らぬぞと、恐しい御罰を與へ給はる、たとへ一欲七埃に穢れた身でも、一たび天理大神を信じ、その教典の主意に山つて、徳を修め、悪を拂ふて怠ることなくば、必ず大きな恵愛を垂れさせられる

神は極めて公平で、又極めて至愛であらせられる

瑣末な悪事も見免したまふことなく、又微細の善事も捨てさせたまふ事はない、故に人は寝るにも起さるにも、善徳を積むことを忘れてはならぬ、一の善徳に由つて一の御利益を享くれば、一の御利益に由つて更に一の善徳を得、また一の善徳に由つて御利益を得る中には、善徳が積り／＼と遂に神に近づくことが能き、も一ツ進んで天理大神の靈光を長く胸の底に宿すことを得れば、やかては神人合一の境に行かれる、人と生れて、人の終りを全うしやうとするには

### 至誠を以て天理大神を尊信敬仰するにある

尊信敬仰とは只手を合せ神前に伏して、祈念を凝らすばかりでは無い、この教典に明示せられた所の主意に則つて、善を行ふにある徳を修むるにある、心の埃を拂ふにある、斯くの如くして少しの悪

愛を享くことを得たらば、この結構な教へを知らぬ人に告げて、共に悪愛を享けるやうにせよ、これやがて神恩教恩に報ずる道であると説いたのである

### 第九は神樂章である

神樂は遠く神代から起つて、今の世にも傳はる、人もし造化成育の恩の廣大無邊なるに思ひ至らば、誰も皆な欣喜抔舞するに相違なからう、感極つては聲に發し、りれでも尙足らぬ時には、嗟嘆するりれでも尙十分に感情を表はすこと能きぬ時は、手の舞ひ足の踏む所を知らぬに至る、これが人類の本性、人間の至情の至れる者、即ち

### 誠の發動である

人は至誠を以て舞ひ躍る、それが自らに神を慰め奉ることになる。神明の至誠と人間の至誠と、相感應するに因るからである。

美伎子みぎこが神樂歌かぐらうたを作り、神樂舞かぐらまいを創め、信徒をして、神樂勤かぐらごころめを行はしむるは此が爲めである

歌は人間の至誠を聲に現はしたもので、舞はこれを形に現はしたもので、兩者相待つて其勤めを全うするので、神慮を慰め、神恩を謝するの道たる事は云ふまでもないが、此中には祈禱の心も單る、夫婦の和合、自他の提携、日の寄進の三大主義が説明されて居る

神樂歌は彼の「あしきを拂ふてたすけたまへ

てんり王のみこと」に起つて全部十二篇ある世に十二下りと稱するはこれである

この神樂歌十二篇には、悉く「救ひの意味」が籠められて、夫婦の和合は人倫の大本であることが説かれる、自他の提携は人類社會の根本であることが説かれる、神聖な労働には至誠の伴ふことが説かれる、すれば神樂歌は天理教の大主腦で、又天理教の創始記といふべきである



第十は安心章である

この章は十章に亘る教典の教へも、たゞこの

安心を得るにある、これ即ち天理教の極致であることを明かにしたのである

生死に二つはない、貧富順逆も版る處は天命である、要はたゞ人と生れて人たるの本分を盡し、さうして天神の命の至るを待つにあり、苟くも天理を明にし人道を踏み、仰いで天に耻ぢず、俯して地に愧づる處なくば、何んの處に懊惱煩悶あらん、生死は猶寤寐の如くである、寤めた間は生で、寐た間は死である、魂が肉体に來た時は生で、肉体を去つた時が死である、生死は肉体に關すること、靈魂に關することでは無い

靈魂は不滅である

故に現世では貧困逆境に居ても、其善徳を積んだものは、後の世(幽界)で至妙の樂境に詣り、やがて富貴幸福の生命を天地に享く、現世では富貴顯榮であつても、善徳をもて心とせぬ者は後の世では貧困究苦に陥つて、果敢ない命を寓するに至る、是が所謂天理である

さらばいかに貧困なものも、これを天命と諦めて、毫も天を恨みず、又少しも人を咎むることなく、いよく勵み、いよく勤むればその中に安心が必ず得られる、假へ富貴顯榮の地にあることも、是皆な天命と思ひ戒めて

假にも自ら慢ることなく、いよく慎み、いよく懼れて、我本分を盡すことに勤むれば、その中に安心は必ず得られる

此の如く天理を明かにし、人道を踏み、仰いで天に耻ぢず、俯して地に耻づることなくば、人はいかに安心安樂であらう、心魂の安樂を得る、これを此教では

### 安心立命といふ

これが此章の大主意である  
天理教典に記す處はこの十章で、その主意の大要は斯うである「てんりわうのみこと」は迷信家の問題ではない「あしきを拂ふて助けたまへ」を唱へ躍るばかりではない、もし四百萬の教徒がこの教

典に従つて、人の道を盡し、神の心を心とし、誠實に勞役に服せば天下は極めて大平である

然し今の天理教徒の現状はどうである、四百萬の教徒が悉く美伎子の心を心として居るか、教典の主意に由つて徳を脩めて居るか、塵埃を拂ふて居るか、これが最も研究すべき問題である

(十八)

僕は天理教の信者ではない、けれど天理教には一種の趣味を持つて居る

それで美伎子の経歴も調べ、教典の意義も究めて居たが、まだ實際に天理教といふものを見たことがない、由て四十一年二月二十六日、大和丹波市宇三嶋の天理教本部で舉行された

### 天理教大祭を見に行つた

この大祭は活きた天理教の教典である、活きた天理教の發動である、幾十萬の教徒が寄り合つて、教典の實習を造るのである、美伎子の主義精神が遺憾なく發揮せらるゝのである

見に行くといふのは露骨に過ぎるが、當時の僕は「天理教を見る」外に何んの趣味も希望もなかつた、僕が天理教をどう見たか、僕

の見た天理教はさうであつたか、當時の記事は、同年二月二十八日以後の大阪朝日新聞に掲げられて居る、念の爲め切り抜いてお目に掛けやう

僕が表面から天理教の研究をやつたのは全くこの時が始めである

### 天理教大祭

(上)

十數萬人の参詣者||誠結構でござります||確に美風

春日和の極めて麗かであつた昨日の午前十時から大和丹波市宇三嶋の天理教本部で春季大祭を執行了、前夜もしくは前々夜から詣つ掛けた信者の數は無慮五萬餘人と註せられ、當日來着した参詣者を併せると殆ど十數萬人の多きに及んで居る、是等の信者は悉く各分教會の事務所に分宿する分教會も支教會もない土地の信者は宿

館、宿館で追附かぬ向は民家を借りて泊る、丹波市から三島へかけては殆ど人を以て埋められる、分教會の事務所は中々大した建築である、中には三百疊敷の大廣間などを持つて居るものがある、その事務所に二千人三千人の信者が宿泊する、記者の訪問した某事務所の如きは、座敷にも臺所にも入り切れないで庭の土間に荒席を敷き疊一疊に四人ほどの割で寝て居る、その信者の一人に向つて、試みに「さう究屈でせうね」と尋ねると「いね、誠に結構でござります、この大祭に私のやうに遅う歸つた者が疊の上で寝るやうでは親元様が立ちません、誠に結構でござります」と満足して居る、何を云つても「結構でござります」の一點張である、天理さんで「結構」と云ふのは、一向宗で「お有難い」と云ふと同じである、

序に記すが天理教の信者は、本部へ參詣するのを「來る」とは云はず「歸る」といふ教祖を稱して「親」と唱へる、年々の大祭に參詣するのは、子が親の家へ歸るといふ意味に解釋して居る、それでの信者間の關係は宛然たる一家族で、先雅は兄、後進は弟、それが互に扶持し合ふのであるから、何處にも此處にも蕩然たる和氣が満ちて居る、是れは確にこの信者の特有する美風である、

大祭前の夜は本部の廣い庭内に幾千萬とも限りのない丸提燈が點る、それは皆各地の分教會、支教會、出張所、布教所から供へるもので、各自にその教會の名が記してある、提燈の下には紫地の旗を樹てる、提燈と旗とが相映する、中々の壯觀である、朝見ると恰で提

燈と旗との敷である、  
 祭典は朝の九時半頃から始まる、八千坪に餘る本部の庭、拜殿、  
 何れも人を以て満たされる、然も不思議なのは究所々々に柏手の音  
 が霞のやうに鳴り響くばかりで、その前後は森と静まり返つて居る  
 誰も居ないのかと思ふと雲霧の如く参詣者が群つて居る、本部の構  
 内へ入り切れぬ連中は、門外に佇立して居る、中には北海道臺灣か  
 らわざわざ参詣に来た人もある、それが一目祭典の式を見ないでも  
 例の「結構でござります」と云つて一言も不平を云はない、どん  
 な目に遭つても不平らしい顔をせぬのも、確にこの  
 信徒の特有する美風である、

(中)

日の寄進 〓お家さん嬢さんの土持ち 〓乞丐は教への敵である  
 十年前の「たアすけたアまへ天理王の命」も今では「天理大神」  
 と唱へる、天理大神といふのは十柱の神を總稱したので、これがろ  
 の親神様であるさうな、この親神の御託宣を受けて、天理教を説き  
 始めたのは、彼の眞道彌廣言知女命——あア長い、とても一口では  
 云はれないから、ざつとばらんにおみきサンで御免を蒙る、ろのお  
 美伎サンの墓は本部の北の小山にある、石崖道で極めて立派だ、本  
 部からこゝへは殆ど蟻の這ふ如くに人が續く、さうして行く人は空  
 巻を擔ぎ、山から歸る人は十中の五六迄はつさねつさと土を擔いで  
 来るこれが又奇蹟である、

腰の屈んだ婆さんも擔ぐ、十六七の可憐しい嬢やんも擔ぐ、立派  
 なお家はんらしいのは白い手拭に少しばかりの土を包んで運ぶごう

するの加と云ふと、今年から十年計畫で建築する本部の土臺を作る爲に土運びをするのであるといふ、これは信者の日の寄進といふので、天理教ばかりにあつて他の宗旨には無い事であるさうな金のある者は金を寄附し金のない者は日を寄附する、日は即ち労働である、それで天理教の普請とか工事とか云ふ事になると、この日の寄進連が四方から集つて、立どころに作り上げて了ふ、現にお美伎サンの墓地の如きも普通なら一年は掛るであらうと思はれる土工を僅か六十日で、仕上たと云ふことである、まだ十分に研究しないから、天理教の可否は分らぬけれど、道に仕へる信者の心は實に花よりも

美しく見られる

それから目について不思議に思つたのは、何處の神社佛閣にもある金何拾圓誰れ殿金何百圓何某殿の寄進札が、何處の隅にも見ぬことである、よもや寄附の無い筈もなからうに、どういふ理かと思つて聞くと、此天理教では、登圓上げた者も拾圓上げた者も、乃至は千圓萬圓寄進した者も、みな一列に取扱つて、未だ一度も信者に發表した事がなく、又寄進を勸誘した事もないと云ふのである、それでもし寄進者が満足して居るなら、名聞の爲に寄附をして、若前の披露の後れるのを、まだかくと催促する紳士貴婦人よりも、天理教の信者はよつほど豪いのである、群衆がろんなである割に、乞食の数の極めて少ない、何處

の神社にも佛閣にも、うるさいほど居やはる乞丐が、なせ天理教にばかり居ないかと聞くと、是れは**お金を恵む人が極めて少い**からであるさうな随分慈悲深さうな信者が多いのに、どうしてお金を恵む人が少いかといふと、これは教祖の教に背くからだといふ、天理教の教義は種々に説かれてあるが、**神髓は忠孝**、それに**和合と勤勉**を**二大綱領**にして居る、人は和合すべきものである、和合して働くべき者であるとお美伎サン旨い事を云はれた、和合して働きさへすれば神の恵みは必ずある「いくら困つても人に助けを享けるな」この一語は天理教の生命である、それに乞丐は人の助けを享ける、人間で居ながら**労働**をせぬ、そんな者は我が教への者でないといふので、些ども

振り向いて見ないのであるさうな、これも確に理屈がある

(下)

帳面のない宿屋 || 喧嘩一つせぬ || 宛然たる太古の民  
それにもう一つ奇蹟がある、天理教のお膝下三島の**宿屋**には**帳面の備へ附けがない**、最も**宿泊帳**はあるが誰れに何を出したといふ**覚帳**がない、それでお客が勘定を聞いても、宿屋の主人は少しも知らぬ「**其處を好い加減に**」とすまして居る、お客も又馴たもので、自分の懐で彼れを食つたから**幾許**、これを飲んだから**幾許**と、牛屋の女中の**勘定**をして置いて行く、足ても足らないでも「**有難うござります**」と挨拶をする、このセチ辛い時勢に、**覚帳**の備へ附けもせず**客任せ**にして居る**商賣**が他にあるで

あらうか、是れでお客の正直なことが分る、さうして又異しいのは、その勘定を足らずに置いて行た客は、次に来た時「いつやら銚子一本忘れて行つた、遅うなつたが拂ひます」と云ふやうな事で綺麗に勘定して行くさうだ

出張の警察官に對つて「どうも非常な人出ですな、さうお急がしいでせう」と聞く「いや、誠に暇です、この信者は五萬人來ても十萬人來ても、喧嘩一つしたとちがなく、紛失物一つあつた事がないから、警察事故は極めて暇です、たゞ群衆を見込んで大阪邊から剪賊が入り込む、それだけを取り締る必要があるだけです」と答へる、天理教教義の一つが「和合」の二字にあつて、信者の多くがりの教義を遵奉して居るのはこれでも知れる、天理教を研究す

る者はよく此の點を視る必要がある

この町の西盡處に「天理中學校」がある、これまでは天理教信者の子弟のみを教育し、神道教師を養成するのを目的として居たがこの學期からは廣く信者外の入學も許さうだ、校堂は中々立派である、總ての設備も整頓して居る、この邊には中學校の設備がないから、天理教のこの開放主義は、土地の入學者にどれほどの利益を與へるかも知れない、宗教家の仕事としては誠に好い事である、大いに褒め置く、但し職員教師には十分學識經驗のある素い人が雇つて貰ひたい

信者は必ず襟元に布片の札を附ける、その布片に「高知」とか「南海」とか「日本橋」(東京)とか記して置く、夫で何處の人かといふ事がすぐ分る、高知の九指と北海道の兀爺さんと立話をする、誠



に親密らしう見ゆる、お互ひに「結構でござりますく」と云ひ交す様は、無邪氣で、朴訥で、宛然たる太古の民らしく見ゆる

眞の表面に現はれた處を見て、これを新聞記事にしただけであるが、是でも天理教の狀態が窺はれる、天理教の信者は斯くの如く樂天主義で、斯くの如く正直で、斯くの如く淡泊無邪氣で、斯くの如く和合親睦で、又斯くの如く勞働勤儉を尊重するのである

(十九)

美伎子が極端の厭世的佛教信者から移つて、極端の樂天教を唱導するに至つたのは、眞に不思議の現象である、僕は此時各分教會事務所を訪問して、最も多くの信者に接したが、信者は皆な平和の色を顔に漾へて居る、何を云つても「結構でござります」と笑つて答

へる、美伎子の平和主義樂天主義がいかに深く信者の骨に沁み込んで居るかを察しることが能き、この信者が何故此ほど樂天主義で居るか云ふと

第一には貧を悲まぬからである

假し現在はいかに貧しくても、正しく勞働さへすれば富は自然に來るものと信じて居る

第二には疾病を恐れぬからである

疾病は心の塵埃から起る、心の塵埃を正當に拂ひ除きさへすれば疾病は自然に癒はるものと信じて居る  
人間もし貧と疾病との二つから解脱して、安心立命の地を得ることを得たら、これほどの幸福はあるまじく、又これほどの愉快はあ

るまい、然も天理教の信徒は此の理想的の生涯を送つて居る、彼等の顔に一點の憂色を認めぬのも、全くこれ等の關係から有らうと思はれる

彼等教徒は祭禮ごとに、神樂を奏する、この神樂は遠き神代に日の神の天磐屋戸に隠れました時、諸神の奏せられた神樂に擬するの、拍子木、太鼓、横笛、胡弓、琴、三味線を合奏する、神樂歌はこの教派の教典とも聖書とも云ふべき序歌十一章と、十二下り百二十章とである、この神樂歌は美伎子が自ら組み立て、自ら作り、自ら誦ひ自ら筆記したもので、天理教の大精神としてある、序歌の始めは彼の名高い

「あしきをばらうてたすけたまへ、てんりわうのみこと」である

悪きは即ち心の塵である、心の塵を洗ひ盡して神の恵みに頼らんとするの、美伎子の本願で、又天理教の理想である

この悪きを拂ふて助け給はる天理教の信徒は、内務省の調査で目下の處三百七十餘萬人と注せられて居る、ざつと積つて四百萬人、四百萬人は日本の總人口十分一に當る、随分大した宗教である、この多くの信徒が悉く心の塵埃を去つて、正直、勤勉、労働、和合の實を擧ぐるに至つたら、警察事故の幾分はきつと減するに違ひない天理教の信徒に地租の不納税者が少いといふのは、事實が已にその發頭を示して居るのではあるまいか、

四百萬人といふ大きな團體でも、その信徒は美伎子の定めた教義の下に一塊となつて居る、美伎子を親、先進の教導職布教師を兄とも姉ともして、有らん限りの真心を運んで居る、彼等は大きな一家

族である、先祖の定めた家憲を誠實に遵奉する優れて柔順な一族である (144)

この一大家族が今までは部屋住であつた、神道本局の一部に寄宿して居た部屋住であつた、それが芽出度く分離して一派獨立の宗旨となつた、十年二十年前までは「てんりわうのみこと」と輕侮されて居たのが、今では一人前の男になつた、  
それに就いては東西の學者間にも、いろ／＼の議論があつたらしい、何かと批評のある「てんりわうのみこと」が獨立したについては、深い意味でもあるやうに、宗教局へ問ひ合す所謂天下の政治家もあるさうだ、然し別に大した事情のある理でもあるまい、人間も大きくなれば分家をする、分家をしたから次郎兵衛が太郎兵衛になつた理である

### 天理教の獨立

といふのは要りが神道本局の所轄を放れて、一派の宗教となつたに過ぎぬ、獨立といふことにはある意味に於て慶ぶべき事であるが、獨立せぬ前は銀で、獨立後に金となつた理ではない、天理教の上から云へば、今までの部屋住みが一戸の主になつたに過ぎぬ、然し今まで迷信家の集合体の如く思はれて居た誤解が、この獨立の爲めに除き去られる利益もあらう、母家に育られて居た息子が、獨立して自由の働きをする如き活潑の行動を取ることにも能きやう、宗教局直接の監督となれば、宗内の改良も随つて完全に催促せられる理である、左に天理教獨立認可に就いて、斯波宗教局長が語られたといふ談話の一節を紹介する

元來内務省に於ける宗派獨立認可の方針とし  
ては本派本局に於て同意さへすれば之を許可  
し來れるにて天理教に對しても同一方針を執  
りたる迄にて既に十年以前に其の獨立を見る  
可き筈なりしも當時世評之を許さざるものあ  
り其の運に至らざりしものなるが天理教に於  
ても獨立の認可を得るには内部を改正するの  
必要を認め四五年來銳意改善に着手し一面學  
者に依頼して教典を制定し布教師の淘汰養成

に努め着着改善の實を擧げ來りしものにて其  
の教典は基礎を古典に置き純然たる忠君愛國  
を説き其他に於ても何等迷信的分子を含ま  
ず布教師の如きも從來の布教師中より二千名  
を淘汰し尙今後の布教師養成方法等を定め他  
の神道各派に比し寧ろ勝れるの點多し且近時  
各地方の調査報告等に徴するも何等社會上有  
害なる跡なく國家行政上別に差支なき以上寧  
ろ四百萬の信徒を有する該教の獨立を許可す

る。は。今。後。國。民。信。仰。の。上。に。於。て。又。天。理。教。改。善。の。上。に。於。て。も。有。益。な。る。べ。し。と。し。之。を。許。可。し。た。る。な。り。最。も。今。後。若。し。該。教。布。教。上。有。害。と。認。む。る。行。爲。あ。る。に。於。て。は。直。に。相。當。處。分。を。爲。す。べ。き。旨。各。地。方。廳。に。對。し。通。牒。を。發。し。置。き。た。り。云。々。

(二十)

天理教徒が大精神として奉じて居る神樂歌はどんなものであるか  
夫の『悪しきを拂ふてたすけたまへ天理王のみこと』の一章のみは  
最もよく人口に膾炙して居るが、その他神樂歌に至つては、天理  
教以外の人に餘り多く知られて居ない、神樂歌十二篇百二十章は、  
前にも記した如く美伎子の自ら組み立て、自ら作り、自ら誦つて、

唯一の布教機關にしたもので、之を讀むと

美伎子の人格が推察される、天理教の根本が  
推察される、天理教の主意が推察される、美  
伎子の精神が推察される、同時に美伎子の學  
問の程度が推察される

けれど全部十二篇をお目に掛けるは、あまり恐れ多いから此處に  
は序歌十一章と五下り目十章とを紹介する、蓋し序歌十一章は十二  
篇の綱領であるから、これをお讀みになつたお方は、大体の主意精  
神が窺はれる理である、まづ最初が評判の

「あしきをはらうてたすけたまへてんりわうのみこと」  
である、次は前にも引用した

「ちよとはなし、かみのいふこときいてくれ、あしきのことはい  
はんでな、このよのぢいとてんをかたごりてふうふをこしらへ  
きたるでな、これはこのよのはじめたし」  
である、次は

「あしきをはらうて、たすけせきこむ、いち  
れつすましてかんろだい」

文章いかにも簡古で、殆んど神代史を讀む感がある、然し普通の  
人がこの假名文を讀んだのでは何の事かさつぱり分らぬであらうか  
ら、こゝに解釋の勞を執る『あしきをはらうて』は美伎子の口癖で  
万事に『惡きを拂ふこと』のみを工夫して居たやうであるから、何  
かと云ふとすぐこれが出る

「たすけせきこむ」を翻譯すると

神様よ、早く我等を助けたまはれ、早く我等  
の罪惡を拂いたまへ、

と急きこんで願ふのである。「一列澄ましてかんろだい」これに曰  
く因縁がある

一れつすましては、一列終つてといふ意味でない、これを素人了  
見に解釋すると、色々に理屈は出るが、美伎子の意志は

「すまして」は「澄まして」で世界一列、即  
ち一統の心を水の如くに澄ませ、さうして心  
に甘露臺を建設するまでに、神の御心に近づ

け  
と訓へたものらしく見ゆる、甘露臺は云ふまでも無く

### 無上樂天

で、天理教の極致である、美伎子の樂いのは、庄屋敷の一方に理想の甘露臺を建て居ることである、この甘露臺は何に用ゆる者か分らぬけれど、天理教の教旨から云ふと、最もよく八埃に遠ざかつた者、最もよく天理大神の教を奉ずるもの、この甘露臺に近づき得る事を、現実に表はしたものらしく思はれる、次は

「よろづよのせかいちれつ、みはらせごむ  
ねのわかりたものはない」

美伎子のセンセイ長大息の体が見ゆる

萬代の世界一統を見渡せど「胸の分りたものは無い」と嘆息した詞である、然し彼女は世界一列が悉く罪惡禍害の塵埃に充たされて居るのを見て、始めて

### 之を救済しやう

と思ひ立たたのであるから、絶望の意味に解するのは不當である、故につきの章に於て

「そのはずやといてきかしたことは無い、し  
らぬがむりではがないわいな」

と断定して居る、自分が神の心を享け、神の眼に由つて世界一列を見渡すと、世界は罪惡や禍害に充たされて居る、日月と光りを争ふ筈の靈性には雲が掛り、誠の道に由て働かさへすれば健全である

べき人間が病氣に苦む、これは一人として神の御心を知らぬから起る惨状ではあるが、それも無理はない、今まで誰もうの道の大意を説き聞かせたものがない

(154)

神の道を説き聞かせ、世界一同悉く神に近い人間ならば、世の人は悉く甘露臺の上に居らるゝ、可しわれ救世主となつて、世界一列の人心を助けくれう

猛然として起た美伎子の風姿を想像することか能きる

美伎子の此時の大勇猛心は、三尺の劔を提げて陣頭に立つた大將

軍の概がある、軍將は目に見ゆる幾万の將卒を敵として戦ふが、美伎子は目に見ぬ悪魔外道を敵として戦ふのである、この

勇猛心は美伎子に美しき成功を興へた、多くの迫害、多くの冷罵、多くの教敵の中に挿つて、前後四五十年の間に四百萬の信者を作り得たは、宗教家としての一大成功である

次の章には自己の立場を明かにして

「このたびはかみがおもてへあらはれて、なにかいさいをさきかす」

と宣言して居る

(155)



人は苦痛煩悶に倦み疲れて、日となく夜となく安心を神に求むる罪惡禍害の救済を要求する、そこで神が面に現はれる、何か委細を説き聞かす、何か委細といふのは、取りも直さず、悪きを排うて助けたまはる、天理大神の主義である

次の章は一轉して、自己即ち天理大神の原始地を詣うて居る

「このところ、やまこのちばのかみがたこ、

いふてぬれども、もごしらぬ」

この處は美伎子の現住する大和國山邊郡丹波市町大字三嶋の内庄屋敷をさして云ふのである、「かみがた」は神館、即ち宮殿、人は大和の庄屋敷を神の御館とは云ふて居るが、その緣故由緒は誰も知るまい、いでわれ一切諸人に説いて遣らう

「このもごをくはしくきいたことならば、いかなものでもこひしなる」

大和國の庄屋敷、即ち地場にある神館は、わが天理教の原始地である、神さまが始めて我に憑らせて、我々人間を闇から救ひなされるべき光明の輝き渡つた處である、その原因由來を詳しく語らばいかなる者も必ず戀ひ慕ひ信仰の念を起すに違ひない、斷定したのである、この自信あつて

「きゝたくばたづねくるならいふてきかす、よろずいさいのもごなるを」

神は我を通じて、委細の事を世界一統の者に説き聞かせられる、その教へは極めて尋く有難いことである、それを聞けば罪惡禍

根を除くことが能き、この教へは何人にでも説き聞かせる、由て聞きたく思ふものは、大和の地場の神館へ尋ねて来い、

神の教へは宇宙萬物の最高の眞理を包んで居るぞよ

と叫んだのである、美伎子は常に信徒や門人に向つて

「われの説く所は神一條人間一條世界一條の教理なり」

と云つて居たさうである、されど美伎子が生前に説いたのは、所謂神一條人間一條の一端で、まだ世界一條には及んで居なかつたらしい、人間一條神一條の一端、即ち神樂歌に現はれた意志を摘要て見ると

一は天理大神は我等人間を救ひ給ふべき本願にてあらせらるゝ事、二は我等人間は天理大神の御救ひを蒙り、兼て御惠恩を受くるにあらずば、眞正に發達進歩して、無上の目的に到達することが能きぬ事、三は此世界の塵埃さへ拂へば眞に極樂淨土なる事、四は疾病は我等人間の罪惡や禍害を現實に表はし示すものなる事、五は信仰次第で十分に神の恩寵慈恵に浴し得る事

の五要件となる「よろづいさいのもと」といふは要りこの五要件を噛み砕いた理義に當る、美伎子はこの五要件に由つて、廣く天下の人心を救済せんとの自信があるから、次の章には勝ち誇つた勇將が、部下の士卒を勵ますやうな口氣で

「かみがでてなにかいさいをこくならば、せ  
かいいちれついさいむなり」

と語つて居る、彼女は神の意義に由る「いさい」の説明は、必然世界の人心を救済し得ると確信する、天理天啓の教への聲を聞く時は世界の人類が悉く奮起振興すると云ふのである、由て更に次の章では

「いちれつにはやくたすけをいそぐからせか

いのこゝろもいさいみかけ」

と語つて居る、

神の意は一日も早く人心を救済しやうとして  
お急ぎなさる、神がお急ぎなさるから、世界  
一統の人類も又振興奮起して、天理天啓の聲  
に應ずるのである

と云ふのである、以上が序歌の十一章で、この次に一下り目がある、一下り目から所謂本題に入るのであるが、あまり長いはお退屈の本であるから、その中で最も美伎子の本領を發揮し得たと思はれる第五篇、即ち五下り目を御披露仕る

序歌は例外であるが、一下り目からは「一つとせ」の數へ歌になつて居る、美伎子は成るべく卑俗平易な語を以て、比較的高遠の理義を説かうとしたのは、誰の目にも入り易く、又誰の口にも記憶し易い、數へ歌を以て教義教文としたのでも知られる

天理教が僅々數十年間に於て、四百萬といふ多數の信徒を作り得たのは、その教義が極めて平易で、誰の心にも解し易く、又行ひ易い故である  
「一ツひろいせかいのうちなればたすけるところもまゝあらう」

これ五下り目の第一章である、世界は廣く人類は多けれど、人心救済の事業に従ふものもあるであらうが、人力を以て救済すべきもの、人力を以て救済し得べからざるものがある、われの救済は世間の所謂救済とは趣きを異にする、われの救済は、人間の罪惡と爾うして禍害を除くので、人力の能く爲すべからざる處を爲すのである、と美伎子の大抱負を述べた處である

「一ツふしぎなたすけは、このごころおびやばうそをゆるしだす」

素人では一寸解らぬ所がある、之を翻譯すると「おびや」は胎産「はうろ」は癒瘡の事である、全体「てんりわうのみこと」は醫者でもないに病氣を治くする誓願がある「てんりわう」は人間の疾病

を、禍害の代表と定めて居る、二下り目第八章に「八ツやまひのねをさらふ」と叫んで居るのもこの意義に他ならぬ

(164)

天理教はもと救済教であるから、人間の苦患を救ふのに不思議は無い、人間の苦患で直接に肉体に及ぶのは即ち疾病である

由て天理教は疾病救護に最も重きを置いて居る、疾病の中でも、胎産と疱疹とは美伎子が最も多く手に掛けて、その靈験の顯著なを自信自覚したから、こゝに特にこの二病名を挙げたものらしく思はれる

「三ツみづさかみこはおなじこゝこゝろの

よこれであらひきる」

いかにも名文で、いかにも理義が明かな、我等衣服調度器具の汚穢を洗ふのは水の力に由るべく、我等心中に於ける一切の欲塵邪埃を洗ひ去りて清淨無垢の身となるには、之を神の力に待たねばならぬ、有形無形の塵埃汚濁を洗ひ去るには、水と神とよく似たりとの意を示したものである

「四ツよくのないものなければどもかみのまへ

にはよくはない」

婆さん旨いことをいふ、確に一面の真理である、美伎子にどれほどの學問あり、又どれほどの經歷あつたかは、前の條を御覽になるとよく分る、一教の大精神ともいふべき神樂歌さへ、蚯蚓ののたく

(165)

りに類する平假名で辨じて居ながら、その云ふ所はこの通りに比較的高遠である (166)

成るほど人間に欲の無いものはない、然し絶大無限の信仰を以て神に對すれば神の光明に打たれて直に欲塵を絶たれて了ふ

「ここで『かみのまへにはよくはない』誰人も信仰の念を以て神に對せよ、神は汝を清浄世界へ導いて呉れるがよ、と教へたのである。靈と欲との關係を説いたのである」

「五ツいつまでしんじんしたとて、やうきづくめであるほどに」

これも解釋を試みぬと分らぬ、神樂歌には往々大和丹波市邊の俗

言が交つて居る、そこへ美伎子、成るべく語ひ可いやう、記憶し易いやう、算へ歌五七調につどめやうとしたから、解らぬのが一層解らなくなつた「いつまでしんじんしたとて」は何日までも信心せよとの義である

信心に際限は無い、信仰の念が進むに従つて人は神に近くなる

「やうきづくめであるほどに」は長へに愛苦煩悶を忘れて

楽しく面白く眞の樂土に遊ぶところが能きる

この意味である、天理教の信徒に聞くと、この章の意味は極めて深い、この章は我教祖が

天理教の教義に由つて、樂天觀を説かれたの

である

と云つて居る、けれどそれを一朝一夕に申し上げることは能き由てまづこのくらゐで置いて置かう

(三十二)

「六ツむごいこゝろをうちわすれ、やさしいこゝろになつてこい」

これも正しく美伎子の本領である、美伎子は天性の慈善家である一凡婦の身を以て、神の心に攝理し得たのも、販する處はこの慈悲善根の心に基く、故に彼女は

人の心の塵埃を拂ふは、一に慈悲善根に由らねばならぬ

と確信したに相違ない「むごい心をうちわすれ」は残忍酷薄の念とも解され、又七塊一欲かとも解せらるゝ「やさしき心になりてこい」は慈悲溫柔の心に爲れよ、である

けれど美伎子の慈悲善根は、世間の所謂慈悲善根と意味を異にする、彼女はムヤミに他の貧苦憂悶を救へこいふのてはない

それは「乞巧に物を與へるな」と説いて居るので知れる、最も彼女も最初の問は「万遍なく圭角のない、普通一般の婦女子の慈善をもう少し廣大にし、熱烈にしたのであつたらしいが、一たび彼の「日の寄進」を唱導し始めてからは

勞働を厭ふものを蛇蝎の如く忌み嫌つたやう

である、自ら求めて究地に陥つたものは、人間の  
 手で救ふべきもので無い、假し一時の飢  
 餓を救ひ得ることも、その心の救ひが全からね  
 ば、彼等はいつまでも究地に在るものである  
と叫んである、彼女は  
 働き得べき体力を持つて居るものは神聖に正  
 直に働け、労働の底には必ず神の助けがある  
 労働を爲さずして究境に陥ぬるものは、必然  
 に來る神の御罰であるから、同情すべきもの  
 では無い

と説いて居る、いかにも最もな次第、これで天理教はいつまでも  
 市が榮ゆるのである

「七ツなんでもなんぎはさゝぬぞに、たすけ  
 いちじよのこのところ」

「たすけいちじよ」は「助け一條」である、即ち天理教の大精神  
 である、もし神に誠意を捧げて飽くまでも信仰の念を進め、教義教  
 旨に山つて神の靈光を胸に宿すに至らば、神は人間一切の苦患を除  
 いて、再び愛苦煩悶はさゝぬ、この恵に山らんと思ふものは少しも  
 早く「助け一條」の原始地たるこの土地へ來れとの意である、  
 美伎子は大和の地場を以て、天理大神の原始地と叫んで居るが、  
 この狭い處に踞る心は無かつた、何處までも神の心を心として



神の意を行ふ任務ある身と信する爲めに、やがてこの教義を掲げて  
全世界の人間を救済せんと企て居る

(172)

「八ツやまごばかりぢやないほどに、くに  
ぐまでもたすけゆく」

の一章は明かにこの意志を似して居るではないか、美伎子の心は

### 人間救済

の外、何も無い、この大主義大真理は全世界何れの國にも行はる  
べきものと信じて居る、苟くも

### 誠の行ける、國

であつたら、美伎子の教義の絶對に弘通せぬ法はないと信じて居  
る、彼女はこれに由つて全世界を風靡するつもりであつたかも知れ

ぬ、故に彼女の門弟子信徒は

我天理教は日本に對しては特別の關係を有す  
るが故に之を國民教と稱すべく、又世界人類  
を救済する宗教なれば之を世界教と稱するこ  
とを得るなり

と云つて居る、その抱負の廣大無邊なるには、取敢へず驚かざる  
を得ぬのである

「九ツこゝはこのよのものもこのぢば、めづらし  
ところがあるはれた」

十二三歳で早くも尼法師にならんとし、十九歳で淨土宗の奥に參

(178)

した身が、数十年の後に天理天啓の道を説いて、人間救済の大願を起し、兎も角も一宗を創始せんと企つるに至らうとは、いかな美伎子も豫期せぬ處であらう、そこで自分ながらも驚いて「めづらしところがあるはれた」と絶叫したのである

彼女は神の心を心として、人間救済の大事業を思ひ立ち、あらゆる迫害に打ち勝つて、豫想以上の効果を、然も迅速に見得るに至つたので、歡びもし満足もし、當時已に教會組織の意味を漏らして、この章の終りに

「どうでもしんぐするならば、かうをむす  
ぼぢやないかいな」

と語つて居る「かう」は即ち講である、講は即ち団体組織である

到底神を信じ神を敬し、神の恩寵に倚らんとするなれば、早く結社して協同一致の實を挙げよと教へたのである、この一節の主意がよく徹底して

### 今日の大宗教

を形くつたのである

神樂は前に記した如く、讀んだばかりでは意義も明瞭せぬ、眞個にあほらしいものゝ様ではあるが、よく玩味して見ると、

一句々々に美伎子の精神が籠められて居る、  
一句々々に人道が説かれてある、一句々々に  
人間救済の道と法とが説かれてある

決して捨てたものではない、僕は尙更に深くその意義を研究しや

うと思ふ

(二十三)

世間から狐憑か狂人の如く冷遇せられて居た美伎子の説教が、いかによく人を濟度し、人を感化し、人を救済したかは、僅かの年月に多くの信者を得た事實に徴してもよく分るが、こゝに最も適切な一例がある、人は美伎子の門下に一人の識者學者の無かつたことをトツコに取つて、『てんりわう』の教への馬鹿氣たことを論じて居るが、美伎子は

學者や識者の手にも乗りかぬる荒くれ男を感化して、羊の如き柔順溫和の人にした例がある

假し目に一丁字は無くとも、肝心の教義を蚯蚓のふたくりで終ます無學者でも

それほどの感化力があれば立派なものである  
學者以上の伎倆がある

美伎子の感化力のいかに廣大であつたかを知る爲め、こゝに播磨龜の事を披露する

播磨龜はもと播州の生といふが定かでない、壯い時から博徒の親分と立てられて、一度も後れを取つたことが無い、大阪福嶋に、相應の地位を保て居た、それで乾兒も澤山ある、壯い時から有らゆる罪惡を積んで來た、播磨龜の名を聞くと、土地の人は皆な戦慄するほどであつた

ろれで仲間の者からは「神さん」と呼ばれて居た、この仲間で「さん」と呼ばれるのは、此上もない名譽であるが、又一面に於ては此上もなく標榜擧げを意味する、親分としての無上幸榮であると共に、人間としては美伎子の所謂罪惡の人である、八塊の塊凝である

美伎子はそれほどの豪傑を羊の如くに手懐けた

龜藏はこのあたりの「神さん」であるだけに極めて貧しい、ろれで隙のあの處を見かけて、時々無心を吹きかける、無心はつまり強迫である

明治二三年の事であつたさうな、この「福嶋

の神さん」は、地場の「活神様」である美伎子の家へ無心に行つた

人間から脱離して、清浄な靈光を心に宿して居る筈の美伎子の前へ、埃で埋つた博徒の神さんが罷り出て、兩々相對した時の光景はどのやうであつたであらう

美伎子が祈禱呪詛をする、神憑を得たなごも稱して、有らぬことを説法する、不動院一派の修驗者が反對する、お上からも手が入るこれ豈龜藏の乗すべき隙ではあるまいか、美伎子の大きな弱點ではあるまいか

「姉御、小使錢を貸してくんな」  
これ龜藏が最初の詞であつた

「私は金で人を助けることをせぬ、私は神の道で人を助ける、まづ私の云ふことを聞かつしやれ」

これ美伎子の答へであつた

「うんな事は聞きたくない、くづく云ふと承知せぬが、これこの刀が目に見えぬか、斯う見てもこの尖頭には數人の血が塗られてある」

龜藏は幾度もその柄頭を叩いて見せた

けれど美伎子はびくともせぬ、彼の心には大覺悟がある、彼は自らを神と信じてある、その確信が鐵よりも堅い

「私は刀に恐れるやうなものぢやない、又は人を切るが、私の舌

は目に見えぬ悪魔を切る、殺さうと思へばいつでも殺せる、まづ私の云ふことを聞かつしやい、私の云ふことを聞いてさへ呉れたら、その禮に金を進せる」

彼女はまづ金の光りを見せて、龜藏の耳を開かせた、龜藏は輕侮の目を光らせながち、美伎子の説教に暫時の耳を貸した、美伎子の説教は一段から一段に進む、一步から一步を進めた、始めは「誠の道」を説いた、誠の前には權勢もなく威力も無く、又白刃もないことを説いた、さうして最後に

「それを偽言と思ふなら、その刃で私を切つて見さつしやい、私の身は誠の一字で固めてある、どうしてお前の鈍刀が立つものか」

と聲を鋭く云つて、惘れ顔に目を睜る龜藏の前へ、一緡の錢を投げ出した

「さ、金を進せる、この金が無くなつたら又お來で、その時はお前の欲を満たすだけ進せる」

龜藏は夢中に彷徨するさまで、何となく一緡を懐にして去た、然も始めて教への一端を聞いた彼の胸に、美伎子の説教が影の如く印つた

然しまだ美伎子の教へに飯依する心は無かつた、胸に何事かを宿す如く感しながら、十日ほど立て再び美伎子を訪れた

美伎子は温顔を以て迎ゆる、  
「おと龜藏か、よく來てくれた、私はお前がもう來るかと思つて、お錢を蓄めて待つて居た」と云ふのである

二度目の龜藏は最初の如き荒くれ男ではなかつた、美伎子を見て莞爾と笑を含んだのである、一たび道を聞いた彼の心は、多少神に接近すべき情愛が生きて居る、

美伎子に對つて笑顔を見せるのは、心に教へを受ぐべき隙を生じて居るのである

美伎子はりの日も一緡の烏目を出して、それを龜藏の前に置いた

「お前はこの前來た時より、大分優和しくなつて居る、この前來た時は恐しい白刃を提げて居たが、今日は持つて居ぬやうぢや」

云ふと龜藏は側に置いた朱鞘の一刀を叩いて見せた

「婆さん、持つて居るよ、今日もこの通りに持つて居るよ」

「お前の持つてるのは刀かへ、私の目からは細のやうに見ゆる」

「婆さん目が悪いの、何なら脱いて見せやうか」

「いや、それには及ばんのぢや、然し龜よ、いかに正宗の刀を持って居ても、ろの人に人を害ふ心が無くば、ろの刀は細よりもまだ鈍う見ゆるが、もしろの人に恐しい心があれば、假しや細を持って居ても、ろれが正宗の刀ほごに人を害ねる、今日はお前に私を切る心は無い、お前の心はもう誠の前に降参して居る」

「婆さん、説教は好い加減にして、褒美の鳥目を下さらんかよ、乃公はろれが欲しいばかりに、わざ／＼此處へ遣つて來たのぢや」

「ろの様に急かつしやるな、お前に進せうと思へばこり、斯うして金を貯めて待つて居た、然しこれは私の物ぢやない、神様の物をお預り申して居る、神様のお詞には、龜藏が優和しうお前の説教を

聞いた後、ろの褒美にこれを進つてくれどのお頼みぢや、お錢が欲しくばまづ説教を聞かつしやい」

龜藏は遂に二度目の説教を聞いた、美伎子は殆んど三時に餘る長時間、諄々として神の道、人の道、天の理、人の理を説き聞かせたさうしてのち

金は人から貰ふ筈の物ぢやない、金は神聖に働き、又眞正に商賣して、その報酬に受けるものぢや、それも老人か、病人か、或は養ふ者も無い小供なら止むを得ぬけれど、立派な身体、若い年齢をして、それで人から金を貰

うといふのは、恰て乞丐も同様である、

お前はまた壯い身ぢやないか、お前はまた十分に働ける身体を持って居るぢやないか

人を強迫して一貫の金を只奪るより、正直に働いて百の金を儲けて見さつしやれ、自分の心がどれほどに違ふ

今日の金はお前の博奕の資本にするのではない、これを資本にして切て百の金でも儲けて貰ひたいと思ふて貸すのぢや、進せるのは決してない、神様から預つてあるのを、お前に貸して進せるのぢやゆる、これで稼いで神様へ返して呉れねばならぬ  
神様は資本の金を貸してまで、人間の心を救

つて遣らうとなさるのぢや、それを反古にするこ、その時こそはお前の身に天罰が報ふぞ

と必々云つて一縷の烏目を渡して遣つた、龜藏はうれを受けて憎むと去つたが、三度目に來た時はもう無心を云はなかつたさうで

四度目に來た時、二縷の烏目に、五百文の供物を添へて、謹んで罪を謝したといふことである

その後どうなつたか知らぬが、美伎子の爲めに善良の人となつて普通の生涯を遂げたことが想像される



次には恩智橋のことを紹介しやう、これも美伎子に泥田の中から拾はれて、美しう身を清めた、天理教徒中の名物である

恩智橋は河内國南高安村字恩智の生れで、本名を平野橋造といつたのである

彼も又河内大和伊勢伊賀の一部を細張とする親分中の親分であつた、河内の恩智橋と云へば、全國中に誰知らぬものもない恐ろしい男であつた、自ら手を下したことは無いが、その乾兒の中には幾多の大罪を遂げて来た猛悪な人間もあつた

さほどの親分も病氣に勝つことは能きぬのであつた

明治十七年の事であつたと云ふ、橋造は一種の奇病に罹つて人事不省に陥つたことがあつた

家族の者、乾兒の者、皆な驚いて近所の醫者を迎へたが験が無い修験者を頼んで加持をさせたが効能が無い、いかにせば宜からうと一同が額を鳩めて居る時、橋造の妹婿に當る森清次郎といふ男が、天理教の布教師を伴つて来た

清次郎はその頃南高安村の戸長をして居た松村吉太郎氏の家へ出入する散髪屋である

この松村氏は當時高安大教會の會長をして居る人で、美伎子の高弟であるから常に天理教を信仰する、その縁に由つて清次郎も亦天理教の信徒になつて居たから、妻の兄が人事不省に陥つたと聞いて

日頃信ずる天理教の布教師を伴れて来たのである

人間の誠の發動、及びその相互の誠の合一に

由つて、疾病の全癒する場合がある

とは兼ての美伎子の確信であるから、門人は皆な祈禱をする、一心不乱に祈禱をする

自分の真心が病者の心に感通するまで一生懸

命に祈禱する

是が彼等の平生である

清次郎の伴れて来た布教師の祈禱に由つて、楢造は一たん息を吹き返したが、人心地が付くと共に、宛ら狂人の如く座敷中を暴れ廻つた、さすがの布教師もこれには手を置いて、直ちに庄屋敷の本部

へ送り届けた

それは美伎子の説教療法に待つ所あるから

あつた

僕は加持とも云はない、祈禱とも云はない、天理教の療法を説教療法と唱へる、それは説法して病氣を治くするからである

楢造の病氣は醫者さへも匙を投げた難病であつたが、美伎子の説教療法に由つて、不思議にも全快した、美伎子が毎日々々枕頭に來て、聲も囁るゝまでに

心の塵埃を拂へ、一生懸命の誠を捧げて、天

理大神を信心せよ、從來の悪事を懺悔して、

人間の道を踏むべき誓ひを立てよ

と説き聞かせた

苦しい時の神頼みとは古くから云ふことであるが、檀造は苦しい時に神の教へを聞かされる、うの教養を有りと感ずるほどづつ、病苦が減する如く感ずる、病氣は今までの罪惡が、形になつて現はれるのであるから、心さへ清淨にすれば、以前の健康に復る、と云はれることが、いかにも正當の理由の如く感ぜられる  
少しでも改心の光りが動くと、直ちにそれが八方へ赫灼する

あア今までは悪いことをした、私の爲たことは悉く天理に外れて居る、これは美伎子の詞に従つて、神の御前に懺悔する外はない

檀造にこの心の動いた時は、病氣が八九分までも全快した時であ

つた

「私は悪いことをして居ました、是からけきつと改心致します、どうぞ私の心を助けて下さいませ」

檀造は遂に美伎子の前に平伏した

「きつと改心するか、きつと今までの悪事を懺悔するか」

常は温和な婆さんであるか、道の要處に説き至ることに、聲は一種壯嚴の音を帯んで來る然もりの詞に無限無上の威力が見ゆる

これは美伎子に接近した者の認めて居る處である

檀造は謹んで改心する旨を答へて、直に妻の許へ皈つた

妻のお虎は郡山洞泉寺町に女郎屋を営んで居た、妻ばかりではない、二人の妾も亦同じ處に同じ家業を営んで居た、この三軒の抱に遊女を合算すると、殆んど四十人以上になる。

彼はまづ第一にこの多くの遊女に暇を出した

「今までの恩地橋は此頃の大病で死んで、平野橋造が生れかほつて出た、恩地橋は女郎屋を営んで来たが、平野橋造は誠心をもて神に仕へる、神様へ奉公の第一着手として、まづお前方を救ふて遣る貸した金は帳消にする、再びこんな稼業に身を落さず、どうか女一人前の身になつてくれよ」

女郎は皆な橋造を伏拜んで去つた

次には二人の妾に暇を出した

その次には數百人の乾兒を集めて、從來の縁を絶つべき旨を云ひ聞けた

「私の身体は神さまに助けられたのであるから、此からは誠心を以て神様に仕へ奉る、お前方も神のお弟子となつて、ごうか眞人間になつてくれよ、今まで貯蓄した財産は悉く心の塵埃がかゝつて居るから、改めてお前方に分配する」

多くはなかつたであらうが、家財家具の他の者を悉く乾兒に分ち與へて、その身は直ちに布教に従事した

彼はまづ郡山に身を置いて、一人二人に道を説いた、第一には懺悔談を遣る、次には美伎子の徳を稱へる、次には天理大神の教義を説く、さうして最後に